

山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻(一)

西澤美仁
牧野和夫
杉山友美

はじめに

ここに翻刻する典籍は実践女子大学図書館山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』大五冊である。本書はいわゆる「古今和歌集序聞書三流抄」と「弘安十年歌注」を併せ書写した一点として注目すべき伝本である。若干の紹介は既に牧野「注釈書の基層―唐名抄・歴代名数などより―」(『講座平安文学論究』第十輯 平安文学論究会編 風間書房 平成六年)に触れているところである。

なお、元超に関しては、『国書総目録(著者別索引)』に『暁堂禪師夢遊漫録』(暁堂述、元超編 寛文十三年序)、『明正院御中陰御経供養記』(元禄九年成)が挙げられているが、聞書表紙に認められる墨書名元超かどうか明らかでない。また、『叡山文庫文書絵図目録』には「乍恐口上書 本山に謀斗なきニ付」(円蔵坊前住証如院 寛政九年十二月)、「奉願口上書 本山に謀斗なきニ付」(円蔵坊前住証如院 寛政九年十二月)、「奉願口上之覚 円蔵坊義今般從国主ヨリ追院被申付ニ付」(若州神宮寺一山 寛政六年十二月)と「圓蔵坊」の坊号を拾うこともできるが、同じ圓蔵坊かどうかこれも詳らかでない。落合博志氏・牧野が紹介した叡山文庫吉祥院蔵『叡山略記』にも伝領墨書「元超」がある。それらについては今後の課題である。

以下に簡明に書誌事項を記す。

書誌

実践女子大学図書館(山岸文庫)蔵 『古今和歌集聞書』〔近世〕写 大五冊

薄浅葱色^二繫ぎ唐草模様布貼ボール紙製帙入り。香色原表紙（二七・九×一九・九糎）。表紙中央上方打付に「古今和歌集第一（五）」と本文同筆墨書。表紙右下隅「圓藏坊」、左下隅「元超藏」と墨書。中央ノド近くに「共五」と墨書。なお、第一冊のみ右肩に「九條家旧藏本」と山岸徳平氏の手による墨書あり。「圓藏坊」にかかつて双辺枰長方陽刻朱印「山岸文庫」。見返しは本文共紙楮紙。

内題並びに本文初行は各冊以下の通りである。

《第一冊》「古今和歌集序聞書／古今に三の流あり一、定家ニ、家隆ニ、行家／問家隆、俊成弟子也俊成ハ定家の父也何、家隆の流と／……／……」

《第二冊》「古今和歌集卷第一／（三字空格）春哥上／古今に付て定家家隆の二の読有而、定家ニ、古今と読／家隆ニハ古今と読也付テ古今ト云ヒ二義有一には延喜以前の歌を／……／……」

《第三冊》「古今和歌集卷第七／（二字空格）賀哥／先賀ト者上臈は年の十二に満する時春秋の説ニ有春の説をハ／花の賀といひ秋の秋をハ紅葉の賀と云也是は必手の数神供／……／……」

《第四冊》「古今和歌集卷第十四（十一字空格）恋哥四／みちのく哥に花かつみとはまこも也此哥は業平の娘を思ハかけて読テ遣ス在原の基平の歌也是は行平の二男也あひみすの歌は助内侍／……／……」

《第五冊》「古今和歌集卷第十七（六字空格）雜哥上／我うへに露置なるとは業平二条后にあひかたく成ければ思ハ深く成て貞観十三年七月七日絶入したりけるに顔に水／……／……」

無辺無界。字面の高さ約二十二・二糎。每半葉十一行々二十五・六字内外、字数不等。本文は少なくとも二手による寄合書。問答の頭などに朱の合点を施す。朱引、朱の書名符等あり。また、朱墨両様の頭書あり。朱の書入はかなり後筆と考えられる。訓み仮名等は付すも本文同筆も含めて少なくとも二手以上。天辺裁断か。墨付は第一冊五十九丁、第二冊五十六丁、第三冊四十六丁、第四冊二十六丁、第五冊四十二丁、全二百二十九丁。各冊の尾題は以下の通りである。

《第一冊》「（四字空格）以上序口伝／古今和歌集序聞書尾」（末）

《第二冊》「古今和歌集聞書（二字空格）以上四季之分尾」（末）

《第三冊》ナシ

《第四冊》「古今和歌集聞書恋部終」(21オ)

《第五冊》「古今和歌集聞書尾」(末)

第五冊尾題後に「(十二字空格) 万里小路親房作也／右古今の注種々致懇望令書写者也いさゝかも／他見あるましきものなり／(三字空格) 寛永拾九年七月十六日／右ノ以本寛文四年秋下旬令書写者也」とあり。その左下に別筆にて「円藏房元超(花押)」と墨署名。

印記については以下の三種あり。各冊表紙右下及び一丁目オモテ右下に「山岸文庫」双辺枠長方陽刻朱印(五・〇×一・三櫃)、各冊前見返し中央付近に「山岸」单辺枠丸陽刻朱印(〇・七櫃)、第五冊最終丁ウラ左下に「岸廼舍藏」双辺枠角落とし陽刻朱印(三・二×一・二櫃)。平成八年度裏打補修。

翻 刻

【凡例】(各冊において朱墨の割合に差があるため、朱墨表記に関する凡例は各冊ごとに定めることにする。)

一、本翻刻は実践女子大学図書館山岸文庫に所蔵される『古今和歌集聞書』(五冊)を底本として翻刻を進める。

一、本稿では第一冊を翻刻する。

一、原本の行取り、改丁に準じ、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付して〔1オ〕の如く示す。

一、漢字は原則として通行の字体を用いる。異体字(ㄱ)、(ㄴ)はそれぞれ(コト)、(シテ)と示す。

一、問答の頭左右に朱で合点が記されているが、(ゝ、/)と示す。

一、頭書の頭左に墨で合点が記されているが、(ゝ)と示す。頭書の合点はすべて墨であり、問答の合点はすべて朱であるため、翻刻本文上で先の問答の合点と特別表記上の区別は行っていない。

一、書名符及び朱引等は煩雑さを避けるため今回は省く。

一、傍注は本文より活字のポイントを下げて原本に準じ、傍記する。

一、一つまたは複数の「ヒ」をもって記されている見せ消ちは本文左傍に(ヒ)と示す。

一、朱筆での書入注に関して、第一冊は朱筆が少ないため朱筆は(ハ)で括り示す。(52丁)

一、虫損等による欠字分は□を以て示す。

九條家旧蔵本

圓藏坊

古今和歌集第一

元超蔵

古今和歌集序聞書

古今に三の流あり一^{ニハ}定家二^{ニハ}家隆三^{ニハ}行家

問家隆は俊成弟子也俊成は定家の父也何^ニ家隆の流と

て別に可有耶 答云俊成没後に定家家隆左右の翹

たり雖然家隆定家の末を承たるに依て一儀を成

する事あたはず爰に師^ノ源大納言経信卿住吉に参

籠して大明神に和歌の不審を祈請す三七日に満する

夜住江の月くまなかりける夜老翁出現して経信に向

て何事を祈請し給ふそと問 答云我鳥羽院より哥^ニ七の

大事を尋ねさせ給爰に諸家の人に尋ぬへきに非ず

仍大明神に此事を祈請すと申翁の聞云いくら程の大

事を承らむと云経信一々に不審を申す翁聞て云安

き事也明神の御託宜を待に不及とて七夜か程^ニ不審

をひらき聞す是を経信注して十二帖の書^ニ作て六卷

を^ハ鳥風問答^ヲ神頭^ヲ風伝と云今六卷を^ハ知^チ願^{ケン}と名^ヲ今此翁明

神の化現也家隆定家に儀を違はむか為^ニ彼風伝を尋て

付此義^ニ定家の流に義を替へ文字読を替て二の流とす

然とも経信より血脈相承なきによつて当流^{ニハ}家隆

を我家の末の物と号す定家にはやまとうたと云ひ家

隆にはやまと哥と読也草子を書に二の替目あり定

「表紙
見返し

「1 才

家^ニ一帳引返て紙の端より書外題を中にかく次家隆
には一帳ひき返て閉目より書外題を端に書 やま

と哥と云^ニ一の儀有一^ニ天竺^ニ乱文とて六義を旨としら
する事有羅什三藏彼六義を伝て唐の詩賦とす道

慈禪師彼六義を日本に伝て哥の六義とす三国和け来
るによつて大和哥と書り問哥は天神の時より初りて人

の時に至まで絶す何^ツ末の世の道慈^{聖武時人}此道を伝と云耶

答云是は哥の詞は非す詞は神の世より伝るといへとも六
義未不備道慈此六義を伝て有しかと人不知延喜の

御時はを御覧初て哥の六義とすされは付^ニ六義^ニ大和哥
と云也 問六義は哥の性也田夫野人の拙き哥にも皆六義

あり何^ツ神世の哥に六義なからむ 答云六義は何なる哥にも

有神世の哥皆是六義具足の哥也然共六義と云事を不知

故に六の品を不弁道慈伝て後に古哥をみれば神世の哥にも六義

ありされは今大和哥と云は皆付^ニ六義^ニ詞也^ニ武きもの^ニふ鬼神

に至まで哥には心を和くるによつて大に和くる哥と云

問花になく鶯水にすむ蛙の哥を讀と云事いかん答云二

の義あり^一には鶯は鳥の中に最初になく物なりかはつは虫の中

に最初になく物也故に一をあけて万をこむる義を以花に

なく鶯水にすむ蛙と云也^二には鶯蛙の正体にて哥読たる

事あり余の虫鳥はかゝる事なきによつて此不思議を顯さ

むか為に鶯蛙を出す也日本記云孝謙天皇の御時大和国天

問^寺に僧あり最愛の弟子あり彼弟子死て後師歎き

○

けれども月日を経て後わすれぬ或年の春すみける家の
前なる梅の木に鶯来てなく其声をきけは初陽毎朝来

不相還本^{（栖）}誓と鳴是を出て見れは哥也此時我弟子の鶯に
なりたりけり^{（ヒ）}と知て深く^{（フカ）}訪けり此哥万葉に鶯の哥と

いれり次河津の歌を讀と云事同日本記云老岐守紀ノ良

貞わすれ草を尋て住吉の浜に行たりけるにうつくしき
女にあへり後会を契に女か云吾を恋しくおもはん時は此浜に

御座せと云後に尋て行たるに女なかりけり彼浜にかへる出来
て居たる前をはいとをる足の跡をみれは文字也讀て見れは

哥也彼哥云住吉のはまのみるめもわすれねは余りにも人
にまたとはれぬる此哥をみてかへるの化したりけると思

てかへる此哥万葉にかへるの哥といれり此二の哥不思議
なるによつて貫之此心を顯さむか為花になく鶯水にすむ

河津と云自余の生類は皆すかたを人に現して哥をよむ事は
多正体にて哥を讀事彼二物の不思議なるによつて此名を

あけたり 問いきとしいける物いづれか哥をよまざると
いへる事如何答云必一切の生類の皆哥を讀にあらず一切の

生類は是五行を以て体とす彼音は五行のひゝき也哥の五句
は五行也故に生類の音を哥とす問なんそ哥を五行と云哉答

云前後の兩句に五七五七々の句有是を五行とす又五常にも
当る也第一の句を木句とす其故は木は東をつかさとのる故に物

を始る義也仍第一句を木句とす木は仁^{（ニ）}当る仁は万物を
は^{（ハ）}つゝむ義也初五の句は一首の頂上として卅一字をつかさと

┌ 2ウ

┌ 3オ

┌ 3ウ

○

○

る故に仁の句とす第二の句は火句火は礼なり第二の句をは
 礼の句とす是は物を敬まふ義也第一句。を尊敬に詞を顯して第

二句に其心を承てこまかにする也故に第二の句は第一

句を尊敬する此義を以て第二の句を礼の句とす第三を

は金句とす金は義也賞罰のたゞしきを云第三句は是非

をたゞしく説故に義の句とす第四は土の句とす是は信也信

は不動義也一首の力は第四の句を次て以てす第四句よはき哥

をは腰折哥と云此句を一首の大意とするによつて土の五行

の中に王と成て四行を取るに設へて此句を土句とす第五

句は水句水は智也智は分別の明らかなるを云哥のてには此句

に極哥のてにはよからされは其心きこえず故にてにはの直しき

歌を智の句とす水は穢れたる物をすゞきゆかめる物を

すくに成す徳有第五句一首の質を見ゆる句也仍設へ

て水句とす是以一切の生類の音声五行のひゞきなる故に

生とし生る物哥を讀と云也問五行の具足する事有情のみ

ならず草木塵沙皆是五行の体也其上長能か私記云和哥

は是五行の体詞ニ書を体トシ心ニ知ト徳トス春の林の東風に動ト秋

の虫ノ北露ニ鳴皆是和哥の体ト云されは有情非情共に其声

皆哥と見えたり何ッ必ず生とし生る物の声皆哥と云耶答

云森羅の万法の声は皆哥云。云とも先生ある物を挙て非情

を下にこめんか為に貫之有情斗を挙たる也問力を

もいれずして雨土をもうこかすと云はいかなる義そや

答云是は必ず一首の哥を讀めは天地を動す也其故いかむと

「 4 オ

「 4 ウ

○

なれは五行の性体にあらはれざるを天とす五行の体にあらはるゝ
を地とす故一首の哥は五行の体なるか故に一首を読めは
天地うこくと云也問目^ミみえぬ鬼神をもあわれとおもはせと

は何ノ義そや答云鬼神も必ず哥にはめつるか故に云也

問何を以て鬼の哥にめつるとは云也答鬼の哥にめ

つる事日本記にみえたり天智天皇の御時藤原の

千方^{チカタ}の將軍と云人あり此人伊賀伊勢の兩國を我まゝ

にして王に不隨時の將軍を指^シ。してせむれ共不叶

是は彼千方四人の鬼を仕風鬼水鬼金鬼一鬼と云風鬼は

風と成て敵の隙を破り金鬼は身金にて箭^ヤも刀も

もたす水鬼は水と成て敵を流し散し一鬼は数千騎か

さきに立て勢をかくす徳あり如此なる間せむる事

かなはす此時紀の朝雄^{トセフ}中納言を大將として千方を

せむすへて不叶ける間朝雄か思はく鬼神は心すくなる

物なりされは千方か梟惡^{ケウ}を突と思て王命を背け

りされは其心を知せんと思て一首の哥を読んで鬼の中に

遣はす其哥にいはいく土も木も我大君の国なれはいづくか

鬼の宿とさためむ時に千方か梟惡をさとりて捨て

去ぬ其時千方を金^シの城に追籠て打ぬ是鬼の

哥にめつる証拠なり又神哥にめつると云事証拠おほ

しと云とも今爰に心さす処は伊勢物語を思はへた

る也伊勢物語に云文德天皇天安元正月廿八日に住吉
に行幸あり此時業平御供奉時玉壇に跪て社頭を礼し

「 5 ウ

「 5 オ

奉るに元魂^{ケンコン}天にかけり恵風心にすゝし此時一首の哥を
 読て大明神に奉る我みても久しく成ぬ住吉のきし
 のひめ松いく世へぬ覽と此時業平歳廿五なり此時明神
 玉のとはそを押開赤衣の童子に現して御返哥あり
 歌に云むつましと君はしら波みつかきの久しき世より
 いわるそめてき此時二巻の書を業平にたまふ裏書云
 玉伝阿古根浦口伝也此書業平か二男在小将^{シゲヘル}滋春に伝
 此意を長能か私記云息男滋春^ハ父公^ノ遺筆^ニ加二丁の幼
 案^ツせり川の行幸より奥是なり是は和哥の奥義好色
 の道を伝たる故なりと書り抑滋春両巻の内一卷を
 伝て一卷をば不伝阿古根浦をば伝て玉伝をば不伝
 業平天照大神^ニ玉伝を奉る業平の時より延喜まで
 五代^ノ。朝に是なし五代とは清和陽成光孝宇多醍
 醐是也延喜の御時に栗田^ノ中納言藤原兼隆卿を伊勢
 大神宮の勅使に奉る此時兼隆か夢想に大神宮より
 つゝみたる巻物給はるとみる驚てみれば錦にてつゝみ
 たる物あり是を御門に奉るに今の玉伝也是を奉るに
 三の義あり一には兼隆夢想の義^二には御託宣によつて
 鏡の宮より取出と云三には大神宮の小車袋をぬ
 い替ける時彼袋の中に入て奉ける王^ミみ付て取給ふ
 と云り是実義歟小車袋とは文に車を織る錦の袋也
 ぬい替事は必ず公家より縫替てまいらする也此時御門
 彼書を御覽して和哥の深義を知給て初て此道を貴ひ

古今をえらひ給ふされは我みてもの哥は八代集の

起り也住吉行幸供奉の人々注に載る分七人なり中納言

行平中宮大夫藤原良門中納言同良国兵部卿有常

左中将業平大内記藤原敏行左馬助同敏方この七人也

問武士の哥にめつると云事如何其証拠多_ト云とも

伊勢物語云業平つるちのくつれより一条の后に

通ひ奉る是を照宣公基経き_ハ付て彼通路に

ものゝふを置て守らす業平えあはて一首の哥

を読 人しれぬわか通路の関もりはよひ_ハこと_ハうちもねな

なむ此哥を読たりければ武士哀かりて業平をとを

して后にあはせてけり是も証拠なり次に雨土開け始り

ける時より出来にけりと云に二の心有一_ハにはいさなきいさなみ

の尊夫婦神として日本国を作て嫁し給ひし時いさなき

の尊いさなみの尊に哥を読て奉り給ふ哥に云鳥羽玉野我黒_{ウハタキノヲカク}

髪毛不_{カミモ}乱_{ミダレ}結_{ムスビ}定_{サダメ}余宵夜野手_{ヨサヨノタマクラワレ}枕_{マク}我臥_{ナゲ}天毛_{アマモ}見_ミ此哥_{コノカガ}の

最初也是は二神始て嫁し給ふ時の哥也此嫁は始て淡路国を

作て八嶋と云所にて嫁し給ひし事也是は庭叩の尾をして

土をた_ハくをみてかくせんと思て女神を仰のけ男神上

にのほりて嫁し給ひし時の事也此事を日本記云いさなきいさ

なみの尊此下に国なからむやとてあまのにひほ_{サシワロシ}こを指下て

青海原をさくり給ふ銚の滴りこりかたまで一の嶋と成是

淡路嶋也二神此嶋に下居て嫁し給て一女三男を儲_ケ奉_ルといへり

問俊頼_カ記にやまと哥は国常立の尊に始ると云此には

└ 7ウ

└ 7オ

いさなきの尊に始ると云此相違如何又いさなきの尊の
哥日本記にみえたり国常立のはみえす此義如何

答云い

さなきの尊といひ国常立の尊と云は事^ト性の名にて一

体二名也仍一人なるか故にいさなきの尊の哥を国常立の哥と

俊頼か云也 問国常立は天神の始いさなきは天神の終り何^ッ

一体二名と云哉答云天に五神あり是は五行自性虚空に

遍満の体にて未事に顯れさりし時五行の面々のたま

しるを天の五神と云されは国常立は木神国狹槌^{サツチ}尊火神

豊斟^{フンケン}尊土神渥瓊尊金神大戸^{オホトノミチ}之道尊^{ミチノミチ}水也此五は

性のみ有て体なし 問無体無形の神に於てなんそ其名

を付るや答云彼自性の時は名なし人の代となりて昔の

事に今の名を付る也 問云今此五神は天の五行の性とみ

えたり今二神は何る人そや日本記云空の中に物あり形^{アタリ}葦

貝^{ガイ}の如し神と成^{ナリ}是始なりと云今是面足^{オモ}尊是なり今此

尊は五行の性まるから一露と成て国土となるへきすかた

虚空に現したる時を云面足と云心は始て形を顯す義也

いさなきと云は彼一露かたまつて五行の形と顯^{アハレ}。てみえしかと

未国土ともならさりし時をいさなきと云されは日本記

には伊弉諾と書ては種をまくと読是は国土のたねと成へ

き体を顯すを云也いさなみと云は此こりかたまれる露国土

と定て万物出生する時を云也伊弉^{イサナ}誦^ソと書ては種をお

さむと読也是は天の。行のたねをおさめて国土と成を云

なりされは国常立いさなきは各別なりといへとも性は一体也此心を

「 8 ウ

「 8 オ

顯はさむか為に俊頼いさなきの哥を国常立に始ると云也問

日本記にいさなきいさなみの尊一女三男を奉^レト生云は誰人そや答云

一女とは天照大神三男とは月神ひるこそさのをなり問日神

を一女と云は^レ何^ノ同き日本記に天照大神垂仁天皇御宇

三年伊勢国五十鈴河^{イヌ}のみな上にあらはれ給ふ垂仁第三の姫

宮通子内親王を斎宮に奉ると云なむそ女神ならんには

斎宮をもち給ふへきやされは一女の義不審也答云日本記二神

五行神を産と云て四人を奉て是則日神の下に二りの神

有を云也されは日神といひ天照大神と云は惣名にて下に内外

宮に二の宮有内宮と云は陽神外宮は陰神也本地兩部にて

座す本地を云には大日と云は惣名にて下に胎金の二尊有

垂跡をいへは惣を日神と云て下に兩社の神座すされは詞に

は四人と挙げとも下に五人なり故に内宮の陽なる事に向^ケて

斎宮を奉る外宮陰なるには風の神とて陽神を合^セ奉

る問陰陽二神の内に必ず一女と挙る哉 答云天を^{ツカヤトルハ}司

陽なり地を司^ル陰也故^ニ国土は陰也是以天照大神は国土の主た

り故に陰を賞する^ルか故に一女と挙^テ一女と云下に必ず陽

神も収なる也 問^{何^ノ}木神。土神との惣。一に云や答木と土とは同^{ナシ}き

物也木朽ては土と成土の精木と成故に一体也二の徳を顯す時

木土神といわれされは内宮は土神外宮は木神二名一体也三男

と云は月神蛭子そさのを也月神と云は鹿嶋大明神是は水

神也水は智也智は善惡を分別する心有故に月神は諸事を

得心て天照大神の後見として国土の事を計給是をあま

└ 9 オ

└ 9 ウ

のこやねの尊と云也又月神の御す糸桑原尊の御子天児屋^{アマノコ}根ノ命とて座す名は一なれとも上のあまのこやねの尊に

はあらず春日明神と申も鹿嶋の明神鹿の上に乘て

春日に移り給ふと云彼神妻は多海命^{タタミ}なり蛭子と申

は二神三男^{アリ}是火神也火ハ礼なり礼は物を敬まふ義也今此

蛭子生れてほねもなくねりぬきなどのことく也二神海に

打入給竜神是を取奉りて天神の子なれば養子とす

三歳の時始て足手目鼻出来す此心を哥に云日本記に

有 かそ色はいかにあはれとおもふらんみとせに成ぬあしたム

すして匡衡哥也かそ色と云は父母なり是は末世の人ひる

子のみことの事をおもひやりてよめる也扱蛭子兄の天照

大神の御前に参たり大神ノ言^{コト}汝はをやにすてられ奉

りて下位の竜神か子と成されは汝は下主を守る神とな

れとて今津国西宮にいわゝれてゑひす三郎殿と云る

是は二神三男なる間三郎とは云也此人同じ兄弟なれとも

下臣と成て兄に弟の神尊敬す故に礼の神と云是火

神南を司さるとも也次そさのを命とは出雲大明神也金

神也金は物を切破るをもつて徳とす此^命。金の性にて心たけ

くして悪神をかたらひ天照大神と軍をする也故に金

神と云義ノ神也義は賞罰直しきを云也賞罰の直き

と云事は物を極むる義也されは金の物を切破り事を極

るにたとふ問日本記地神五代と云に二義有一^一には日神

月神蛭子そさのを等をいひ二^二には日神よりふきあは

┌
10
ウ

┌
10
ウ

せすの命に至までを云此相違如何 答云上に云義は
五行神は面々に五行を司る儀を奉也所謂木は木を司
る儀土は土を司る儀以下如此されは是は面々の代を
司るを五代と云也次日神よりうのはふきあはせすのに
至までを五代と云親の代を子の讓

得如此相續して行代なりされは俱に五代と奉たれとも

義異なり王代記に次の段をのする事は王代記は代々
相續の義を宗とするか故に次の義を用る也二云又
雨土ひらけ始しより起ると云は必ずいさなきのみ
ことの事にあらす是は天照大神国土をつかさとり給

ひし時そさのをの命惡神魔太羅神及び一千の惡。
をかたらひて大和国宇多野に城を構て八齒ノ劍を

一千堀立て軍を散し給ふ大神大慈大悲を以てい

くさをせは神多亡ぬへき故によくなしとて月神た

ちからをの命氣長足珍司ノ命安閑玉由理姫ノ命

此四人を始として八万の神達を率して大和国葛木

天間の原あまの岩戸にとち籠り給ふ此間国土調暗なり

六年と云彼時は六年と知に不及雖然後漏尅是を檢へて

六年の分斎に計此時月神の御子嶋根見の命御供に

もれて闇中に座ましけるか天照太神恋奉りて神達

を大和国天香久山に聚奉りて庭火をたき天照大

神の御形を鑄奉る鑄損したりしを日前神と云是は

内侍所は日神にて御座す故に其質を前に鑄損し

11 才

11 ウ

奉りたりし故に日前宮と云是は今ノ丹生^{ニフ}ノ大明神

或は高宮^{カウ}と云後に鑄すましたりし今の内裏の内侍

所也彼鏡を賢木^{サカ}の枝に付て神達哥^カと舞^{マヒ}給へり今の

の催馬楽共也此声^{コエ}ほのかに石戸に聞へければ日神我^{ニギハヤヒ}。恋る^{コイ}

神の有やとて手力男^{タチカラヲノ}命に石戸を開せたまふ仍

手ノ力^{チカラ}ノ男と書てたちからをと云也此時日神石戸より

御顔をさし出し給ふ御光りかゝやきて神達の御顔しろ

くみへけるをあら面白やと云り是より興ある事

には面白と云也此時日神石戸を出給て香久山に影向

有是初て国土ひらけて国明に成されは此時を雨

土ひらけはしめし時と云也此時梅の枝に鶯の木つたふ

を御覽してよみ給哥有 青柳の糸^{イト}うちはへて

鶯のぬ^{てふ}ぬるかさは梅の花笠此哥の心は梅の花

の鶯の頭に散かゝりたるは笠をきたるに似たり

とあそはせり此哥三十一字の第一番也催馬楽の哥也二の

義有といへとも供に天地のひらけ始ると云事其謂

ありされは何れの義にも僻事にあらす彼山を天香

久山と云事は天照大神影向の時異^{イキョウ}香薰^{キウコン}たりし

其香代の末まで久しきか故に天香久山と云也天は

天照大神の義也 問^{マタ}神の世に今の詞あるへからす何ッ

或はむまたまの我くろかみと読又あをやきの糸う

ちはへてなと大和哥詞のやはらけたる言にかけ

るや 答云是等は皆神世には詞もこはくゆらゝかな

鳥羽玉

る事もな^けれとも万葉に入し時右大[□]臣橘の

諸兄^{モロニヒ}中納言大伴家持等言をやは^ヒらけ風情をこま

やけてかゝる哥に作り成^{セル}なり是は詞おほきをは詞

おほき哥に作り三十一字の哥をは卅一字のなたらかなる

哥に作りなせりされ^ハ。万葉集は神世のこはき哥

を彼人々やはらかに作りなり也^セ問^ハむまたまと云事

は大国に秦ノ始皇ノ三宝ノ其一^ヒなりなむそ爰に取て神

の世の哥の詞に作るや^ハ答云哥は漢土の詩をま

なふと云也されは大国の詩賦に云処をこゝには哥

をはむはたまと云はくろき物に文にも云か故にそ

れを承て我朝にもくろき事くらき夜なとをは

むは玉と云自居易の筆にも^{カウ}暗行不^レ知路^{ウヘ}鳥羽玉^{タマ}幾

ツト書り秦ノ始皇の三宝は^{トカタルニク}渡角^{ムバ}。鳥羽玉。玉銚。此三^{タマホコ}な

り。渡角といふ鳥羽玉とは異国より五尺のからす飛

来る二の翅のあひにくろき玉あり是よりさす

光くろくして国くらくなる湛忠と云始皇の將軍

はからひて大きな家を造り彼中に種々の

食物を置是を吃に鳥内に入其時あみの袋を

作りて家の口にはりて一百の続松をして家の

内に入て鳥を追出^ツす鳥網にかゝる聚て^{あつまりて}

とらへて彼翅の合なる玉をとりてからすをころしぬ^{ヒヒヒヒヒ}

此玉を箱に収めたる時は世間明になり箱を出す時

は闇しされは秦の武王と軍をせし時にまけんとする

13 才

13 ウ

時此玉を出て世間を闇く成て我身にくるなり
其より物のくろきにも夜をもむは玉と云人三に

玉鉾と云は秦ノ始皇の母かたの四代の先祖に耀鬼ヒと云人
龍宮城より玉をかさりたるほこを取て出たり此鉾代々
伝て始皇に四代に至る此鉾はゐかきにをきたれとも

主にさきをむけす態とむけて置ケハはねかへりて

えをぬしにむくるほこ也始皇秦の武王と軍せし時軍

に負て湖州におつ始皇の孫酒公と云人敵に放

れて始皇の行方をしらす広き野ニをとしたりき

是を酒公見付ておもはく此鉾はさきを主にむけ奉らす

されは此鉾のえの向えへたらむ方に始皇はましますらむ

とて此鉾を取て持ほこをしるへに尋行ぬ是は鉾を

繩にて結てほこのえを行方のしるへにて尋行てあひ

奉りぬそれより道を玉鉾と云也是は注のことはなり注は、俊頼かした作なり次にあ

まのうきはしの下にしておかみめかみとなり給へる事

を云ると書是は天照大神の天の石戸に閉籠り給

ひし時いき長たらちをの尊あかたまゆりひめの命夫婦

となり給へりし事をゆりひめの一腹の弟生馬武見ウハタケ

あねのみめのうつくしきを恋て有けるをたらしの

みことの妻にし給へる事をみてうらやみて読る哥

有日本記云 わきもこか心は我によらねともよそ

になり行ことはうきかもとよめり此哥卅一字始て第二番の

哥也前の青柳の哥は卅一字の第一番なりあまのうきは

天の浮橋

久方

しとはあまの石戸に籠り給ひし時かちこちの通路に石の橋を渡したり其下に神達のあつまり居給ひたりし故に天の浮橋の下と云又日本記にあまのうきはしと云別の儀を云事あり是は天の惣名をあまのうきはしと云事有其故何^ト云^ニ天は雨露を下て国土をわたす故にわたす義を以て浮橋といへり此段を家隆にはいさなきいさなみの哥の夫婦と成給ひし事を云といへり其段は既^ニ前^ニ畢^ス同事を二所に書へきやされは玉ゆりひめの事なりしかあれとも世に伝れる事は久方のあめにしてはしたてる姫^{にめ}にはしまりとは是は夫婦のなからひの道より哥を讀事此人に始まる事を云 久方の雨とは天にはあらすたかまの原あまの石戸にてゆりひめ等の夫婦となりし事を云 下てる姫とはあかたまゆり姫也あめわかみことはいきなかつちの命の事也久方と云に三の義有

天に付義一月に付義二天に付義は一神日本を作りて十方を定めしに天は無辺際故に久しき方と書てそらを久方と読り月に付義は一には久形とと書り是は月めぐりとまる事なく久世をてらす形なかな故に

久方の月と書り万葉云 ^{アキノヨ}秋野夜 ^{ノキミ}不^ツ尽^{キニ}長^{ナガ}目^メ世^セ紫^シ賀^カ毛^モ 是坂上の郎女か哥なり

月尔不^ツ尽^{キニ}長^{ナガ}目^メ世^セ紫^シ賀^カ毛^モ 是坂上の郎女か哥なり

り是其証抛久方の証哥なり 二天武のあさ日のかゝやきたるに御つほに出給ひたりしにむらさきの御袴より御ひさのしろきか見えたりしを藏人曾祢丸といひし

16
オ

15
ウ

人み奉りて月の出るに似りと云て思ひかけ奉りてよ
める哥ありヨルアラスツキカトモミルツホキミノクマナキ夜照寸月賀登毛見留大君野無限カゲノヒサカタノイモ

影野膝形野色 是よりして月を膝形と云大グチニアルヘシ

君とは王をも云后をもいふ是万葉の哥也わきも

ことは三の義有一には若女と書二我妻とかき三美

女と書今はいふは美女の義也 古撰云田口の人丸

か哥ニ云 塩照哉難波野浦野明目爾見始天美女ツシテルヤナニハノウラノアカラメニミソメテワキセコ

賀恋紫気景野面影爾立又万葉云 若女賀衣カハニシキカゲノオモカゲニタヒトノソテヒツルソモ

春雨音立天独在人野袖潤留曾毛 此哥は小野ハルサメフツタテヒトリアルヒトノソテヒツルソモ

常初か哥也 小野小町父なり又万葉云 粟津野哉アハツミツノヤ

薄花踏分尋天毛何相摩紫我妻行方不知毛此三ウソハナフミワタツネテモイカニアヘマシワキセコニタニシラス

の差別有といへとも今是に云処は美女の義也せうと

の神のかたち岡谷にうつりてかゝやくとはゆりひめの

みめうつくしくて光りをかたにゝうつりてかゝやくを

うはたけ見かみて思懸てよめる上の哥の事也せうとは

弟をもいひ又兄をも云爰のは兄の義也されはゆりひめ

はうはたけみか姉なりゑひす哥と云又ゑひす哥と云

に義有ゑひすは心武くして前後をかへりみす神世

の哥は前後も不知いわるゝに随てよみたる哥也故

にたとへてゑひす哥と云は此に俊頼かかけるは此人

をは家々に云処しかあらす唯ゑひすの王の義なり

家隆の云くせうとの神の形おかたにゝうつりてと

かけり是は天照太神の御すかたををねみの命片似ニ

せうと。

ゑひす歌

16
ウ

17
オ

年 ○

あらかねの土

うつり奉^ルを牟^ヘいへり 問^レ天照大神におひて爰には
 夫婦の義みへすなむそめかみおかみと成給といへるや
 答云是は必ずめかみおかみと云は天照大神にかきらす
 今爰におかたにゝうつしてと云は上の言はにはなれて
 別の詞也と云難云是は詞あまのうきはしと云より多ひ
 す哥に至まで同^シつゝきと序の注の面もみへたり
 是を別の事といふ事不審 問^レうはたけみとは何
 物そや 答云うはたけみか父は乙戸^{ヲト}の多ひすとて
 多ひすの王なりしかあるにたまゆりひめの母三戸^{ミト}
 名尊^{ナミト}を犯^{ヲカ}して其腹にまふけたる子也故に母方は
 神父方は多ひすなり 次あらかねの土とは国土の始は
 草木土なふして石金のみ也すさのをの尊に始ると
 は上に三十一字の哥二首有といへとも皆是いまた国土
 さたまらず国の主定まらざりし時の事也今すさの
 をの尊に始ると云は国土定り日神国^{フルシ}の主と定り
 給て後三十一字の詠起^ル事此尊に始ると云是は日本
 記にこまかに見たり天照大神すさのをの尊に追ひ
 出されてあまの岩戸に籠りたりし時をねみの尊^{シヤウ}
 の請によつて天の香久山に八万の神をたなひて
 影向し給ふ此時すさのを宇多野に城を構て居給
 へるにをねみたちからをゝ大將にて彼尊を打奉る
 へき事を日神に申日神言はくおほくの神を亡さ
 む事不便なり我行てすさのをゝみ出むとて一

「 18 才

「 17 ウ

人座まして立ならへたる一ケのきつはの剣を一足に
けやふり給此時一千の悪神達恐れ奉りて皆に

けさるすさのを一人に成て居ところなく迷ひあ

りき給ふ程に出雲国曾鷲^{ツカ}の里^ニ至る海上にうき

てなかるゝ嶋あり尊と是は大地につゝかて流れ

ありく嶋なれば日神の国にあらし我すみかとせむ

とて手にて摩^ヌ給ふなてられて嶋とゝまりぬ

手摩の嶋と云こゝに居給へるはるかのおきに八色の

雲立てみゆ尊あやしみて見給に老翁美女を抱て

なきゐたり尊怪みて問給ふ 答云我は天照大神

国狭槌^{クニサツチ}の尊末也吾名をはあしなつちの尊と云神也

神変をとろへて下位となれり抱きたるは我娘稲田

姫也海中より八頭龍^{ヤマトヲロチ}涌出しておほくの人をとり

今は此姫をとらんとする問是をなけくと云尊ノ言

はくさらは婿にとれ彼龍うたと云翁言我は天神の

末也汝を婿にとらむ事有へからす何なる人々と問

尊答云我は天照太神の弟也さらは婿にとらむ

とて婿に取ぬ時に尊八の酒舟に酒をたゝへて海に

うけて湯津爪棹^{ユツツアシ}ハツ作りてひめか頭にさす是は海

松^{マツ}の根にてけつれるかうかいなり龍涌出して八の船に

頭^{カビ}を入れて酒にのみゑひてねたり八のくし八の龍の

頭と成て敵の龍を段々にくう尊剣を抜て龍を段々

にぎりぬ尾より八色の雲立つ彼をわりて見は剣有

ちはやふる

尊とりて後に日神に中なをりし奉りし時奉る
今のあまのむら雲の剣是なりさて尊稲田姫と

夫婦と成て手摩の嶋に宮作て住給ひし時

三十一字の哥を誦給ふ 八雲立出雲やえかきの哥也

やえかきとは神の居垣^{キカキ}也やえかきとは弥重垣と書り

つまこめにとは妻籠めん料に作れるやえかきをとよ

める也此歌卅一字第三番哥也ちはやふると云に五の

義有三は天照太神に付義一は諸神に付一^ニ一切の物に付

義なり今二の義は頭に不読^ニ天照太神に付三の義誦也

一^ニ天照大神一千のつるきのはをけ破り給ひたりし故

に千齒破神と書り二には天香久山の処にて御子達の

き給へるちはやの袖に岩戸をひらき給て天照太

神の出給御光神達のちはやにふるゝを千葉や触る

神と書てちはやふる神と云三にはすさのをの尊出雲に

住て後天照大神を打たてまつらむとて悪神を語ひ

て天照大神宇多の神部^{カミベ}に茅葉^{チハ}の宮を作てまします

所へよせたりければ千の葉の宮をけやふりて出給

ひければちはやふる神と云是を以て大神宮今に至る

までちはやをもつてふくなり 問^ノ人の代と成てすさ

のをの尊に始ると云事^{コト}是は上の出雲やえかきの哥の

事をいへるか若然は一^ツ事を二所に書事^{コト}いかなる義そや

しかも彼事神代の事とみへ此は人の代と成てと云此義

如何答^{コタヘ}是は上の所と同所に非す是は日本記を見るに

20 才

19 ウ

人王第四代の御門の御時までは出雲やえかきの哥より
後卅一字はたえたりすきの尊又卅一字の哥を

読給へり其哥に云 立歸る道は山ちのとをくとも

尋とはむとふとしれかし此哥は人皇四代の御門懿徳

天皇出雲に行幸有ける時尊御対面し給ひて上原

と云所までおくり給て御名残に読給ふ哥なり

自是後彼宮の行幸たえたり此哥人王の代と成ては

第一番哥也又聖武天皇出雲へ行幸有けるに丹波国

まで御座けるに夢想によつて還御なりにけり

問すきの尊はあまてる御神のこのかみと云事如何

上にては兄弟の義見へたり此義不審答云是は兄

の義に非ず子の義也問云兄弟の義上には見たりなん

そ子と云や 答子と云は実の子には非ずすきの尊

日神と兄弟の上父子の契約有しを云其義何に云に

尊常軍を發て日神を打奉むとす此時日神尊

をすかさむか為にをねみの命を使として一説にはかた

くらへの尊を使とも云すきのをの陳へ遣給ふ汝我子

と成たらは一年に十月をゆつり出雲石見の両国をとら

せんと言是にふけりて天照大神の養子と成て

讓得により子の神と云されは十月には諸神出雲に

行て仕へ奉るなり此心を経信哥に 出雲には神有

月をいかなれは神無月とよもにいふらむ 女とすみ給とて

宮つくり給とは稲田姫と住とて手摩の関に宮作

— 20 —

— 21 —

／＼
磨端
チ
チ

○

し給し事を云也問出雲弥重垣の哥は上に書畢ぬ

なむそこゝに出や 答云是は上の段なりといへとも段々

中に書事廻なきか故に段の終りにかけりかゝる事

此哥にかきらす有へきなりかくてそ花をめて鳥を

うらやみと云は上に神の代々に三十一字の哥出来かくて

哥の道伝て彼花にめて鳥をうらやみ事にふれ物に

よせて哥の風情おほくなれりと云花をめてとは花

の面白事を云鳥をうらやみと云には二の義有一には鶯の

はなになるゝをうらやましかりて読たる哥の事を思は

へてかける也其哥六帖に云 もゝちとり花になれたる

「アタナルメト云コト
あたしめははかなき程もうらやまれけり此哥の心を

思はへてかける也二には郭公の時を知てきなく事を

浦山しと云義也霞をあはれみとは霞の風にはれやす

き事を云露をかなしみとは露のはかなくきゆる事を云

是等に付ても哥の風情おほくなれりと云心也 とを

き所も出立足もとにはしまるとは千里の路も

出立一足に行つくへきと云 高き山もふもとの塵端

よりをひのほれるとはちり積りて山と成義也此哥も

又如此なるへしとは哥をこのまむ事もいとなきをなけく

へからすいとけなき哥も功をつもりて人丸赤人か如く達

者と成と云心なりちりひちと云事左伝云輕君^{ケイジン}其

行惡臣下^{カウカシテ}不用^{チリヒミ}たとへは如^ニ風前^ニ塵端^ニ先立^ニされはちりひち

とは塵のはし至てちいさきちりを云問難波津の哥は

ㄥ
21
ウ

ㄥ
22
オ

御門の御はしめと云事如何御門の御初は神武天皇

也難波津の哥は仁徳天皇の御時の事也彼間十五代の御門をへたてたり何^ッ仁徳の御時の哥を御門の御初とい

ふや 答云是は大方の人皇の初をはいはす仁徳天皇の御

門といはれ給ひし初の時の哥也と云儀也是は応神天皇

に四人の御子座ます嫡子二流^{ニル}王熊王也応神位を第四の

御子に譲^リ奉る彼御子我末子にて位を不可付とて兄二

流の王子^ニゆつり奉る二流は我譲りをうけすされは君位

に付給へとて互に論し三年国に王なし終に難波津

論し負て位に付給ふ此時王仁の大臣まことに位に付

給へるかとしらむか為に難波津の哥を讀て奉る難波

津にさくや木の花冬こもりとは難波津のみこ宮ゆつり

あれは位の花は咲たれとも末時の王にあらすされは冬さき

たる梅の花のことしと讀り今は春へとさくや木の花と

は今こそ御即位あれは時の花よと讀る也いふかりおもひて

とはまことに位に付給へるつき給ひぬをしらんとて此哥を

「不審トカケリ」

讀て奉りけるなり此御門を難波津の帝ともいひ仁徳天皇

共いひおほさ^ゝきの御門とも申す賢王也王仁は百済国の

人也応神天皇の御時日本に来て大臣となる此哥は懿徳天

皇の御時立帰るの哥より五十二代の間三十一字の哥たえたり

仁徳天皇の御時此哥又三十一字の哥出きたり清輔記云

一の御子に位を応神譲り奉るに一御子世をそむかむか為に

四郎の御子に位をゆつり奉る互に位を論し給ひて三年^ニ

「 22
ウ

「 23
オ

山の井

はらなき
給

○

なり給と云又世継の如くは仁徳の弟に位を譲り奉りたるを
兄仁徳にゆつり奉る互にうけとらすして三とせなり

遂に弟御子命を捨給ひたりければ兄位に即位といへり

古今の注には二流の皇子位をうけとらすして吉野河にて

身をなけて死給と云三義不同也といへとも今当流の云に付て

暫く仁徳を譲りをうと云以て為義あさか山の哥はうねめの

たはふれより読と云は葛木の大君はしめて橘の姓を給り

始て大政大臣と成て陸奥国の守に成て下りける時に

近江の采女と云女を思て具して下る国のもの雑事

わろしとて大君腹立し給ひければ采女かはらけとりて

一首の哥を讀て大君にさす歌に云 あさか山かけさへみゆる山

の井のあさくは人をおもふ物かは哥の心は大臣程の人の

雑事わろしとて腹立し給ふあさくみゆるふるまひなりと読ル哥也

これになこみ給ひけり此うたにはちてはらなき給ふを云
「心トクルヲ云」

葛木の大君とは天智天皇の御子也采女は藤原の富士雄^{フシウ}の娘也

大君を是天智天皇のをさな名と云義有山の井をは必あさき事

に読なり山の中の井は何^ニ深けれとも木の葉散入に寄て自

然にあさくなるなり此哥は難波津の哥の後卅一字の哥たえ

て天智まで廿三代卅一字たえたり天智御時あさか山の哥を

うねめ読出す是よりして三十一字今に至までたえす此

二の哥は歌の父母と云は浅香山の哥より相続なるか故に哥

の母となつて是よりさきには難波津の哥人皇の世と成て近き

三十一字なるか故に哥の父とす是を父とする事はたちか

「 23 ヲ

「 24 オ

へるの哥も難波津の哥も共に人皇の世に出来れる哥なれともあさ
か山の哥よりはさしつきの上なるか故に近きに付て哥の父とす

てならふ人の始にもしけるとは哥の手本にもしけりと云心也

抑哥の様六なりとは六義の事なりからの哥とは詩を云也

詩にも六義を調ふ物也されはからの哥もかくそ可有也六義

と云は風賦比興雅頌也風と云はそへ哥也そへ哥と云は思

ふ心をかくしてこと物にいひなして心を顯す哥也風は色

体みへねとも物にふれて風としらる此哥も如何なるか故に

たとへて風の哥と云今此本哥難波津の哥也難波津の

哥は心は仁徳の事をよみたれとも面には梅の花に云なして

梅の花よりも心をもらす故に風の哥とは云二賦哥とは

かすへ哥と云されは文撰周公旦言_ニ花をかすへて待来る

に幾の春^カ留らむと云り又訓にはくはるとも読なり

されは賦は一首に心あまつたる哥也本哥云袖ひちてむすひ

し水のこほれるを春立けふの風やとくらん袖ひちてむ

すひし水は納涼の心なりこほれるは冬の心なり春立

けふとは春なり是は一首に三季を読む哥也又云さく

はなに思ひつく身のあちなさ身にいたつきのいるもしら

すて咲花におもひつく身とは愛執の心なりあちきなさと

は遁世の心也いたつきは無常也いたつきと云に付てあ

またの義有源氏にはいたつきと云はいたはりかしつくとかけ

り 労 冊 伊勢物語ニハ 労着とと書り是はかしつく義はなくして

たゝいたはるはかりの心也万葉も此義に同す今此古今に云所は無

ㄥ 25
ウ

常の義也文記の録ニ云相女野草庵リ食蓬注年暑忽「穆王」異名ナリニ忘テ
無常ニ懷悦ニ文意は周の蘭王御時馬相如と云人有依テ無実ニ岳

岸といふ野になかされてよもきを食として九年を送る此

間に政恵と云三十巻の文書を作りて王に奉る御門是を御覽

して賢者なりとしろしめして車をもつて召返して

天下の後見となさるされは野にも無常を觀せしか今はわす

れて懷悦云へり此文に付て無常をいたつきと云咲花

の哥は同伴の黒主の哥也俊頼此哥を難云今此さく花

の哥はたゞ事に読たる哥也五の雅の哥と云へし何ッ賦

の哥と云哉三比の哥是をはなすらへ歌と云此哥は物を二

ならへて何もおなし程なりと云哥也同伴の家持か読る本哥云

君にけさあしたの霜のをきていなは恋しき（かま殿）事にきえやわた

らむ是ノ哥の心は霜をきてはかなくきゆるかことくに我人を

こふる恋しさに命きえぬへしと読なり六義の事に云よ所に

のみみてややみなんかつらきやたかまの山の峯のしら雲これ

寛平のひめみやの河内にすみ給けるをよ所なりければ

常にもあひ奉らさりける事をかつらきの雲のよ所になる事

になそらへて読也此哥は面は風の哥也如此の哥は皆比の哥也

問俊頼難云心地は比の哥と云は物を二ッおてそれに似りと

云へきに今此本哥の如きは霜きえぬへく恋しさもきえ

ぬへしと比へたにるなりされは比の哥と云つへしとはおほえす

一母ナリ
たらちねのおやのかうこのまゆこもりいふせくもあるかいもに

あはすて此哥の心はひいるのまゆの中こもりてそとをいふせく思ふ

ㄥ 26
ウ

ㄥ 26
オ

様にいにもあはていふせくおもふ事の同じ様にいへり是ノ哥こそ比と覺ゆれと云り答云さきの霜のきえやすきに恋の

心きえぬへきをならへ今いふせき事いもか心のひいるの心にならふる其かはりめなしされは何れも比の哥と聞たり俊頼か

不審する処其謂なきか四興の哥是をはたとへ哥と云是は

物を二ツならへて勝負を分る歌也人おほく比興の哥を同

様に思ひなせり当流ハ不然比は同様なるを云ヒ興は勝劣を分つ

其かはりめ也本歌云我恋は読ともつきしありそうみのほまの

真砂はよみつくすとも此哥勝劣を分哥なり如此哥をは皆興

哥と云此哥は文屋の朝康か哥もありそ海トは二の様あり一には幾海

と書て有そうみと読二には有添海と書てありそ海とよめり

万葉に云淡路嶋波持結留笠岳野越方見波幾海曾毛同

集云 有添海野浜野沙爾居留鶴野音聞時曾夢波悟

良紫此は人丸の哥也今の此哥のありそうみの義なり

五雅哥此をはたゝこと哥と云是は心語たゝしきを云なりこの字

をたゝしとよむ事孝経ニ小雅小旻の章と云是はすこし

きたゝしと云読有されは雅の哥とはたゝしき哥也本哥云

いつわりのなき世なりせはいかはかり人のことの葉うれし

からまし如此のことはたゝしき哥を云也俊頼難云雅哥

と云は心のたゝしきを云也今此三所の本哥はことはたゝしき

哥也されは質哥とこそいふへけれ何ソ雅の哥と云哉 答云

雅の哥とは心ことは共にたゝしきを云質哥とはことはたゝしく

すかたのすくなる哥を云也今此哥は心ことは共にたゝしされは

さきくさ
ミツヘヨハ
三葉四葉

雅ノ哥と見^{タリ}何ッこゝろのたゝしきを云はすして言はかりの
たゝしきをもつて質哥となつけんや汝か引所本哥

山桜あくまで色をみつるかの哥は有政の祝言の哥と見へたり
雅とは不見何ノ先の本哥を難して此哥を雅の哥と言はむ此
義不審也六頌の哥と云は祝言也頌の字を祝とよむには

たゝ君^ニ付上^ニに付る義也祝の字は上中下に渡る義也文選云

鳥公^{キムマツリコトツハサカケリ} 政^{メタクミ} 翼^{ヲホフ} 翔^{メタミ} 四海賢政^{ヲホフ} 惠雲^{メタミ} 覆^{ヲホフ} 千万^{メタミ} 峯^{メタミ} 此は是万民頌上^ニ百

臣守下^ニ故也されは頌の字は上にいわふ義也和哥云此殿はむ
へもとみけりさきくさのみつはよつはに殿つくりしてむへも

とみけりとは宜哉の義也さきくさはひの木也さきちく

さとも云三ツは四ツはにとのつくりしてとは三棟四棟に殿造

りしてと云義也されは此殿のとみさかへたるは道理なりひの

木を以て三棟四棟に家をあまた造てさかへたりと云也

文集云楊貴妃依有^{イッキ}天朝之籠^{イッキ}一楊国忠^{カナヘリ}早^{カナヘリ} 階^{カナヘリ} 星林之位^ニ而

問家雖榮三棟四棟^{フサハ}梟惡之計^{フサハ}身^ニ余^ニ被^レ滅^ニ安禄山^ニと書り

されは三ツは四ツはとは三棟四棟なり俊頼難云今此哥は上の

さかへていみしき事を讀たり祝とみゆる所なし今此か

すかのゝわかなつみつゝ万代をいわふ心は神をしるらむと

云哥いわる哥とみえたり是は正月七日に若菜をつみて

春日の宮に手向て君の御事をいわふ也されはこれこそ祝

哥なれと云 答云今此頌の哥と云は上に付て祝事を云也

されはことに今の此殿の哥祝哥とみへたり此殿のさかへたる

と云事何ノ祝にあらさらむや今の世中色に付人の心花に

28
ウ

28
オ

むれ木

いをる

ほに至る

○

29オ

なるとは昔の人丸赤人なむとは皆是哥の実話を讀てあたなることはなし今の世の人はことはにふけり色に付て哥の実を不知と云へり 色このみの家にのみとは男女好色の家には非す哥の家也好色は哥を本とするか故に哥家を好色と云 むれ木のひとしれぬことくなりてとは哥の家に伝る深義は哥の家より外には不出故に世の人は不知と云也 むれ木に三の差別有一には溺木ト書二には底木ト書三には古木ト書溺木と云は必ず水におほれたるにあらす木のはうはらくさの中にもあれうつもれたる木を云二に底木ト云は水の底なる木につく三に古木は立木なれ共かれてふりたる木を云順か和名集序に云亀山の南大井河ノ辺リニ有一ツノ底木栄花散テ後送幾ノ春一とかけりされは此字は水底より外には不可書

按田利名ノ中将の家の集云秋風野吹碎天野古木ノ野殘一色無葉波散奴覽しほるゝに三の義有一には碎二には

枝折三には 湿 文屋康秀哥に吹からに野への草木の枝折

れはむへ山風をあらしと云らむ万葉に云高山戸尾上吹

越秋風爾猶不 顯谷野 溺木何花見無 まめなる所には

とは実となる所にはと云義なり哥のまこと知所也ほにいたすへきにあらすとは哥のまことを知家には此家の深義をほに

いたして人に可見一あらすと云ほにいたるとは顯出すと書り

文集云河水常ニ清メ水上賢聖ヲ求虛天長ノ陰世ニ出暴政ノ主ジ是は雖未顯一以先表一知事を書りされはほにいたすへきことに

もあらすとは顯れ出すへき事一あらすと云事也 その始をおも

29ウ

へはかゝるへくもなむあらぬとは昔の哥説し人の事を思へは
かくあさき事にはあらずと云へり古の代々の御門とは四代

の御門也是は聖武天皇の御時橘諸兄卿時に中納言後
には左大臣とす中納言大伴家持二人に仰付て万葉を撰
す是比は哥なくしてわづかに三千首をあつむ是は

一万首と心さし給へともたらぬ也聖武崩御の後孝謙

天皇の御宇同＊撰者をもつて五千首に撰す孝謙

崩御諸兄覺して後称徳廃帝光仁此三代は万葉ノ事

無沙汰して被捨光仁の御時家持卒す桓武天皇の御

宇に至て諸兄か孫奈良丸か一男内舎人橘清友を撰者

として又万葉ヲ撰此時六千首也桓武崩御の後平城

御時同撰者を以て七千首にきはめて世に弘め給ふ

問万葉の主は奈良の御門と書けるは何の御門そや

答其発起をいはく聖武天王なるへし世にひろむるに

つかは平城天王なるへし雖然平城御門よりこのかた十代

と書けるに知平城を以て万葉の主とするか春の花の

朝秋の月のよことにさふらふ人々をめして哥を奉らしめ

給ふとは聖武の御時は諸兄家持人丸赤人等也孝謙

御時は懷人良女垣武の御時は泰是樹清友冬嗣安部

船守（家持父）田口ノ人丸是人々をめして花に付月につけて哥を

よませ給を云也是をさふらふ人々と云也あるは花をそふ

とは花をおしむとて云也是は大国の祚国花散々を惜て

足にまかせ岸より落て死たりし事を云也其をしる

└ 30
ウ

└ 30
オ

へき所にたとると云文集花賦云 遠霞埋跡^ニ惜落花^ニ

^ニ祚^ハ

幕^ハ祚国捨身不待後ノ春^ニ此賤ノ心を書るなり祚国は漢の

代の人なり あるは月を思としてしるへなき暗にたとる

とは是は遊子^カ月を待てゆふやみに遠き里まで行事を

引てかける也朗詠^ニ遊子猶行残月^ニ書る此心なり史記云

瓊^ニ有夫婦夫^ハ云遊子^ト婦^ハ云伯陽^ト契^ル老^ニ子^ニ二八之候陽三

四句^{ナリ}愛^テ玉^ヲ菟^ヲ終夜座道路ノ口^ニ晩^ニ俳^ニ遠郷^ニ待月ノ出^ニ一晩^ニ登

山峯^ニ惜月入^ニ然後^ニ陽没剋成深欺^ニ進月ノ前^ニ得^{タリ}相見^ニ

依此執^ニ成天生ノ身^ト為牽牛織姫之^ニ二星^ニ降^{タチ}再陰陽^ノ

国^ニ守男女交会之媒^ニ為道祖^ト立之^ニ二神^ト云り文の心は

唐瓊と云国有かの国に遊子伯陽とて夫婦有共に月を

見より外の事なし伯陽九十九の歳死ぬ遊子深く歎て

かの形見には月をのみ見るに伯陽鳥に乗て月の前^ニ

飛来て見此鳥は伯陽か存日かうし鳥也遊子深く歎て

思しにゝ死ぬ遊子又存日にかふし鵲に乗て天に飛行

て天星と成ぬ夫はひこほしとなりぬ牛を牽^{ヒカ}へて

居たり是は存日に民にてありし時の振舞也婦はたな

はたとなてはたをおりて居たり是も存日の振舞也

河をへたてゝ向ひあはせにゐたれとも帝尺毎日に河水を

酌て宝瓶に入れて宝をふらす此故に彼水をかけす

事なし是は日々に番をすへて守らす間可渡ひま

なし七月七日には帝尺善法堂参詣の日にて宝瓶の

水をくます是ひまをゆるされて七月七日にあふ也かさゝ

かさゝきの橋

紅葉橋

さゝれ石

きの橋と云は彼乗たる鵲鳥羽をならへてひこほしを乗
せて渡してあはす河を渡す儀を以てかさゝきのはし
と云也まことに渡る橋にはあらず 問何鳥鵲わたせるは
しを一方に付てかさゝきの橋と云や 答遊仙唄を

見 鳥鵲のやめからすとよめりされは二を書いて一に
読也以之思ふに二ノ鳥なれ共引合てかさゝきの橋と云
其謂なきにあらず 問七月七日には未紅葉不可有何是時

紅葉の橋と云哉 答曰実の紅葉にはあらず二星の別の
涙くれなゐになかれてかさゝきの橋にそむくれなゐ

の羽の義をもつて紅葉の橋と云漢書云鳥鵲橋ノ頭ニ敷紅
羽ニ二星屋形ノ前ニ風 冷 是文も葉羽の字ことなれともくれ

なゐの羽と云に付て紅葉とよめり再降トハ陰陽国ニあひかた
きわかおもひに世間の事をも思ひしりて人の契りを

守らむとちかひて下男に降て道祖乎立の神となる
乎立とは山の中のたむけの神也たむけの神と云は

是也手をもて石をなけ木をおりて手向る間たむ
けと云也されはしるへなきやみにたるとは遊子伯陽

月を待て暮のやみにまよひ候事を云也 心ノをみ
給ひてさかしをろかなりときこしめしけむとはかの

四代の問如此の風情を以て哥を讀せて人の心をさ
かしをろかなりと知食と云也 さゝれ石にたとへとはまさ

この数の多キ如君かさかへもおほくましませと云心也
さゝれ石とは小破石と書りされはまさこの義也万葉云

32 オ

32 ウ

つくは山

君賀代波千世爾野千世爾小破石野巖登成天苔野
無數摩天是其本哥也 つくは山にかけてきみを
ねかひとはつくは山に二の儀有一^{ニハ}付葉山と書是は一切の
山の枝しけきを云也是は枝しけくて是の木の葉の
彼木の葉に付彼木ノ葉是木の葉に付義にて付葉

「
33
オ

唐の吉野

○

唐のつくは山

富士の煙

山と書り是は付葉山のかけのしけきか如^ニ我君の恵の
みかけしけくましませと云也二^ハ常陸国のつくは山
の事を云也日本記云綏靖天皇ノ御時日本に金ノ山を
つくらむと云誓御座して此事を乙見^{ヲトミ}と云人に云あ
はせ給ふに奏して云日本小国也此事難叶しか
あれは大国の金の山を宣旨を以て請し給へと奏す
其時宣旨を以て大唐に向て金の山を請し給ふ唐の
五台山の未申方かけて飛来て二に破れて一^ハ金峯山
と成一常陸の筑波山となる是時の綏靖の御威徳のことくに
今の御門もましませとねかふ也されは此集には唐^{モロコシ}のよしのゝ
山にこもるともをくれんとおもふ我ならなくに後撰の雜ノ哥に
もろこしのつくは山の枝しけみ君かみかけはしけきか
けかなされは此等の哥みなもろこしのと云は唐より飛来山
なるか故也富士の煙によそへて人を恋と云事は大方恋は
身をこかす故に煙にたとふされとも今富士のけふりと云
はことに恋より立によりて爰にあくる也日本記云
天武天皇の御時駿河国作竹翁^{サチタツウ}と云物有竹をそた
てゝうる人也或時竹の中に行てみるにうくひすのかひ

「
33
ウ

松虫の音に
友を忍

こあまた有其中ニ金色の子あり不思議におもひて取て
返りて家にをくありきて七日を経て家に帰るに我
家光りてみゆ行てみれはうつくしき女有かれ光を放
つ何人そと問に女答云我は鶯の子と答翁我娘として
赫や娘と名くするかの国司金樹ノ宰相是を御門に
奏す御門彼女を御覧するに実にくつくしやかて思
給て女后の如し三年を経てかの女王に申さく吾は
天女なり君にむかし契り有て今下界にいたる今縁
つきたりとて鏡を形見に奉りてうせぬ王此かゝみを
抱てね給ふに胸にこかるゝおもひ火と成ぬ鏡につきて
わきかへりくしてすへてきえず公卿僉儀して七
の箱に入て本所なれはとて駿河国に送りをく猶やま
さりければ人をちて富士山のいたゝきにをく此煙た
えす是にて富士の煙を恋によむ也朱雀院御時
富士のけふりの中に声有て云 山はふし煙もふしの
煙りにてしらすはいかにあやしからまし是は何人そと
問たりければかくや姫と答といへり 松虫の音に友を忍
とは昔大和国に有ける物二人互に契深し津の国あへ
のゝ市へつれて行か市にて行別れてあきなひする程
に行わかれて互に行方をしらす一人先立かへりける
か彼を待て居たりける程に夜に入て彼物死ぬ彼市
にのこれる友かれを待けれともみへさりければひろき野
に出て尋ありく彼死たる物の家まつしくして草深

└
34
ウ

└
34
オ

○

くして松むし多^クなくされは松むしのなく所^{トコロ}ことにか
れかあるかと思て尋ありく程にある所に松虫なきける
所を見^ミ彼物死て有供に一所にて死なん死なんと契
りたりしかはとて身をなけて死ぬ其よりして友を

└
35
オ

○

忍ひ友を恋る事には松虫の音によそへて云也高砂住の
えの松もあひ生のやうにおほえと云事二の儀有一には
高砂も松の名所也住江も松の名所也かれこれ松のひと
つにをひあふたるか如くに今此道のさかへたる事有と
云り問高砂は播磨也住江は津国也三日路也彼松生合
事あらんや此義不審答云実には是実儀にあらす序
の作物とて家に習事是也高砂と云は上古の桓武平

○

城等^ノ万葉を撰し哥の道をさかりにせし事を云住江と
は今世にすみまします延喜の御時みつね貫之等を召て
古今を撰し哥の道のさかりにいづる事を云也松とは松の葉
の久しきか如に大和哥^ヲことの葉の久しきを云会生の様に
おほゆとはかの上代の御時と今の延喜の御時と此道を賞
する事相同くおほゆると云事也 男山の昔を思出て

└
35
ウ

女^ハ郎^ニ女^ハ花^ニ

女郎花の一時をくねるとは日本記云又源氏の注にも見たり

平城天皇の御時小野頼風^{ヨシキ}と云人有八幡に住けるか京に
女を思て互にかちこち行かよふある時女の許に行ていつ
のひはかならずこむと契てかへりぬ女待けれともこさりければ

男ノ八幡の宿所に尋行て問に家なる物答云此程初たる

女房のましますあひた別の所におわしますといひぬ女

八幡川
涙川

うらめしと思て八幡河のはたに行てやまふきかさねの衣
をぬきすてゝ身をなけて死ぬ男家に行たりけるに

┌
36
オ

家の者京の女房のましましたりつるかかへり給ひぬと云男
あはて追行に河のはたに山吹かさねの衣有見は彼女の
常にきる衣也怪み思ふ程に河の中に彼女死て有女をは
取上て孝養して彼衣を取てかへりてかたみに是をみ
る男宮仕により京に久しく居たりけるに彼花をた
にかれか形見にみむと思て此きぬを取にやりたりけれ
は土におちてくちて女郎花となれり使者此由をかたれ
は頼風行てみるに女郎花咲乱れたり花のもとへちかく
よらむとすれば此花うらむるけしきにてこと方へなひ
く男のけは又をきなをる此事を引て爰に女郎花の一時
をくねるとかく也是よりして女郎花となつく男生を
かへてたにかく此女我をうらむるされは彼女是我故に身を
すつ我はかれか故に身をすてゝひとつ所に生あはむと思
て同河に身をなけて死ぬ彼男をは八幡山の中にをくる
故に八幡山の中に男山といふは彼所也麓に女塚と云はかの女
うつみし所なり故に對して女塚男山と云也八幡河を
涙川と云も此事に起れり哥に云いかばかりいもせの中をうら
みけむうきな流るゝ涙川哉此哥は彼二人の夫婦のうらみ
の事を思かへてよめり 是より彼河をは涙川と云也伊勢物語云
いつくまでおくりはしつと人とはゝあかぬ別のなみた川まで此哥
は有常か娘ノ京へ行けるか読て業平か奈良に有ける所へ

┌
36
ウ

兎手柏^{ウサデカシ}
ねしけ人

末の松山

涙川のはたよりおくりのものかへりけるにとらせける哥と
みえたり彼注にもなみた河とは八幡河と云へり又万葉云
奈良坂野兎手柏野二面登爾毛加久爾毛倭人賀南^{ナラサカノウサデカシノシメノタツサケトニモカクタニモオノケヒトカガ}

このてかしはとおほとちの花を云とも見へたり実には女郎
花を云と見たり女郎花のはなは少なきものゝ手をあつめ

たるか如しと云二面とは日のかけのさすに随てひらくると云
故にひとかたならすひらくる義を以て二面とは云なり又は

上の頼風か恨ををみなへしの儀を以て二面と云是はなひ
く時とをきなをる時とを二面とは云也奈良坂に女郎花おほ

かる所なれは奈良坂を云也哥を以てそなくさみけるとは
女の男をくねるにも哥を読んでなくさめけるとそ云是に

男山のをみなへしの一時をくねると云事は女郎花の

男をくねりたりし事を女の物くねりするに云なして書

る也時をうしなふとはをこりさかへたる物は時を失と云

是は栄花の余に世のおそれを知ぬを時を失とは云とき

めきたる人とはさかへたる人を云漢書云漢高祖破^{ヤナル}四懸^{コト}

軍^{イハサシ}早速^{サツソク}張良階下^{テイゲ}二臣^{ニシ}為捨全助命^{シテゼンシュミコト}此是大将行^{レハナリ}項庄^{カワ}

雖武家富失時^{タケノカチカミシメ}終^{ハシ}被^レ伐^{ウツタ}いへり されは時を失とはさかへおこ

つて世のはゝかりをしらぬを云也 松山になみをかけと

云事は恨みに読事也日本記云斉明天皇御時或人みち

のくの国に成て下る心さし深く思ふ女をくして下り

けり末の松山ははるか沖にひら／＼として有山也彼山

をみやりて男のいわくあの嶋に浪のこえん時そ我等か中は

37 才

37 ウ

38 才

野中の清水

はなれむすると云て互にたはふれ行程に任はてゝ登りける時に彼嶋をみれば海の面※2あれて

波のしまをこゆ男のいわく我かいひし事を神仏

の知てはなるへき様を知らせ給ふにこそあれとて女を

すてゝ男登りぬ女かの嶋をつくくとももりて彼嶋を

よくくみれば平山※1にてあなたに打浪こなたのいさこに

しらみあひて浪のこゆる様にみゆそれを女み付て実

はこえさりける物をこゆるといひて別れける事よと

思ひて京に上て男に此様を云男こと女に思付て

有ければ実にこゆるをこえぬと云てこそあれとてあはす

さて女弥男に恨深くて死ぬそれよりすゑの松山に

浪こすは恨に読也野中のし水を汲てと社は本の心かはら

ぬ事に云也本歌云 古の野中のし水ぬるけれどもとの心は

かはらさりけり此心は桓武天皇の御時美作守秦下丸ハタノサカリ

と云人備前守に成て下けるとき播磨の印南野のし

みつくみてのみたりけるか殊勝に思ひてすぎぬ其後京

に上りて病ける時云われそのかみいなみ野の水をのみた

りしかよかりしに彼をのみたらは能なりなんとてくみ

にやるくみて上るほどに道の程にてぬるく成たりけれと

本よき水と思習たりければつめたしと思ひぬさて

かの病やみぬ又或義云有人いなみ野をとをるに彼

水をのみて実に能水かなとてをりぬ又上りける時は

ぬるくわろけれともよりてみればもとよしと思なしたりしか

しきの
はねかき

は能水と思されはもとの心かはらぬ事によむなり あき

はきのしたはをなかめとは世中のうつろひやすき事を云

萩はこと木草よりもあきといへはうつひろやすき物也源氏

云たのまれぬ人の心はあきといへはやかてうつろふ萩の

下露是も此心をよめる哥也 あかつきのしきのはね

かきと云に種々の義有と云とも家に伝る処二つ也古仙と云

もろこしのしきのはねかきいくえして人かきまさる

らん又当集に云あかつきのしきのはねかきもゝはかき君

かこぬ夜は我そかすかく先上の哥の心は唐のしき

のはねかきと云は心は漢武帝の王子嶋公と云人有彼人は

左右のかたに翅ありこの羽しきのはなり是人此羽をもつて

数里を飛徳有此君死ぬとて我左右の翅をきつく子の

嶋丞相にあたえ彼羽を家の守りとす嶋おほくこの人の

家に有呉国の王の姫宮唐にて来て彼丞相の女と成て

余所よりかよひけるかある時のあかつききけるにしき

はねをつらねてかきの如くしてえいらて帰りぬそれを

ひきてしきのはねかきと云あはてかへる事によむ也注万

葉云日本国にしきのはねかきと云事有光仁の御時

紫藤の中納言と云人内裏につかふまつる女を思ひてかよひ

けるかいにかゝおもひけんあはす成にければ行てうらみければはこ

のかけこに入たるしきの羽を取て夫に取せて云是を持て

あかつきことに来て我家のまとにかくすをかけ百日に満せむ

ㄣ
39
ウ

ㄣ
40
オ

い
ちの
は
し
か
き

○

涼

吉
野
川

百日満する夜男かきたるよしにて行てあはんと云女さらは

今は其羽をたへと云失てなしと答ければさては我をは大

切に思ひ給はねはこそ其羽をはうしなひてましませ

定てこと物にてそ書給ぬらんとて終にあはすそれより

あはぬ事にはしきのはねかきと云又行家本にはしち

のはしかきと云り仙洞にて古今合の有けるに人々此事を

不審す行家答申さく我家の本にはかゝりと云或人

難云貫之か書たる序をはその家には何としてかゝせる

そと云答云貫之か万葉の本にはしちのはしかきと有

我家は草案の本にて書りと云しちのはしかきと云事

日本記云涼和御時藤原鳥養^{フジ}云人有同氏永手^{ナカテ}大臣の

娘を恋てあはんと云ければ答云心さしあらは夜ことに来

て我のる車のしちのはしにかすをかきて町に満せむ時

あはんと云百に満する夜親死にてえゆかす遂にあは

て其よりあわぬ事にしちのはしかきと云

吉野川をひいて世中を恨と云事二義有一には吉野川は

水ふかき川なれば月日のはやきにたとへて世中を

うらみと云万葉云とゝまらぬはやき月日は吉野川なけれ

とまらぬものにやはある当集に云吉野川岩きりとを

し行水の音にはたてし恋はしぬとも二には小蔵の親

王の世中を通して吉野のおくに籠り給ひしを云也長能

私記云天君雖可為聖帝^{ミコトノサカヒ}一恐^{コソレ}墮^{ツク}執政者^{シツサツシヤ}一再^{ヒトツキ}不^フ帰^キ旧宅^{キウタク}と云り

是は文武天皇第七の王子をくらの親王賢に御座ければ

└ 40
ウ

└ 41
オ

受禪あるへきにてありしをきゝ給て位に付なは出離
の道たえなんとおもひて十九にて出家して芳野山に

閉籠り給ふ臣下此君位に即給ひなは世中の政よかり

なんとおもひて請し奉りけれとも遂に歸り給はすあ

まりに請し奉りけれはかへらしとて吉野川に身をなけて

死給それよりして吉野山を世を通るゝ処と云也 問

ふしのけふりもたゝすと云事如何此煙は一条院の御時

まで立けり其後も時□は立と云り然はたゝすと云事

心得かたし 答云是はたえたる儀にはあらず不断の義也

当集に云こと不断^{タムス}なけきうくひすひとゝせにふたゝひとた

にくへきはるか新撰六帖云なさけをも不断とふへき人なれ

はおり／＼ことはたのまるゝかな是歌は藤原親長おり／＼に

かよひけるかさはる事有てとはさりけるによみてやる大江

の齊光^{タキ}か娘の歌なりされは不断義也 なからの橋も

つくるなりとは今の延喜御門の御位のはしめなれは

世久しくましまさん為になかしと云なからのはしを造な

りと云家隆云なからののはしも尽るなりと云是は君か代の

久しき間なかしと云なからの橋もつきぬると云難云今

延喜は位の後九年也末はしめなるを御代つきぬと云はぬ^む

事いま／＼しされは此義不可然 いにしへよりかくつたはる

うきにしとは万葉の御時より哥の道ひろまる事を云なら

の御時とは聖武の御時万葉を撰し始め給ひし事をいふ也

おほきみつの位かきのもとの人丸とはおほきとは官の字を

取て云時に大夫なり大夫の大を取ておほきとは云み
つのくらゐとは時に従三位上也木工頭兼大夫也抑此人丸

とは天武天皇の御宇三年石見国戸田郡山里と云

処にかたらひの家命と云者有彼か家のそのに大なる

柿木有かの本に廿はかりなる男なまめきたる出来れり

家命いかなる人を親はなきかいつくより来そと問

答我はおやもなく来る□もなしと云此由を家命か主丹後守

秦の冬通に此由を申冬通丹後国へよひて何事を

かすると問に哥をのみ読と云也よませて聞になかるゝ水の

ことし冬通是を御門に奏す御門和哥の御師徳と

して始めて五位に任す柿本より出来はとて姓を柿本と

給ふ又は大和国豊国にすみける時かの家の門に大なる

柿木有依之柿本と云義有されとも実義には家命か家

の柿本也名を人丸と云別の口伝有彼豊国は今の大和の

安倍守なり文武御時四位に任す年四十八聖武御時從

三位木工頭兼大夫に任す同御時神龜年中三月十八日

に八十四にて薨す此時の影小野の春高宣旨を給て此影

をうつす又四十八五十三の影有 問人丸の烏帽子直衣を着

事如何烏帽子直衣は凡人の着事にあらす人丸は其重代

の上郎にあらす此事如何 答云人丸は天子の御師徳たる

に依て余人にことなり仍て烏帽子直衣を着也人丸の直衣

は白青の藤の直衣也さしぬきは不定哥のひしりとは哥の

長者と云義也ひしりとは物に長する義也聖主とは賢王を云

└ 43
オ

└ 42
ウ

費長房か春秋ノ記云縦^ヒ我^レ仕^ヘ仁帝^ニ属^ル卑姓ノ民^ニ昇^ル星林^ノ
之位^ニ今得^テ為^ル仙聖^ニ有^リ寿久昇雲之徳用乎文の心は 大臣名也

長房賢かりしかは周の御門仕ひ給はんとしけれとも仙を
このみて壺公^{コウ}弟子と成ぬ其後仙の長者と成ぬ此事を
悦^ユて書ける筆也此文にもひしりとは仙に長したる故にと也
されは和哥のひしりとは和哥に長したる義也君も

人もみをあはせたりとは三ノ義有^一には聖武と人丸と
同じ心に此道をこのみ給ふを云二にはみをあはすとは実と

あわすと云義也第三の義は別に口伝有 君とは聖武御門
を申人とは人麿を云也 秋の夕竜田川のなかるゝ紅葉は
御門の御目にはにしきとみ給とは聖武御門養老六年に

御即位あて七年の十月に竜田川に行幸あり此時の御哥

に竜田川紅葉みたれてなかるゝとありけむ此御哥の事を
云也 春のあしたの吉野山のさくらは人丸かめには雲かとの
みなむおほえけりとは人丸の哥によし野山のさくら雲に似
りと読たる哥有其事を書^ル也此哥秘哥なるによつて

八代集に見え堀川院御時内裏にて諸卿抑古今の序に
人丸かめによものさくらをは雲かとのみなんみゆと云はいつれ
の哥をさすそと云て八代集を多本集めて見此哥なし
時に俊成の許へ人丸の家の集を被召家の集中に此

哥有此におしかみをして持て参る御門是をあやし
みてはなちて御覧せんとし給ひし時おつ取てまかり立
仍勅勘有後に猶御尋ありければ奏して言^フ不及力我

赤人

あやし
あやなく
あやなし

人丸

○

家の大事天子にも御師徳と定まらぬ前にゆるし奉る
事なしと申其時さらはとて御侍読に被召て奉授

やまのへの赤人と云人有とは或人は大和国山辺の

へむに住ける人と云更には不然上総^国・山辺の郷より

聖武御時始て上る人也其親たれとしらす此人も同く

御門の御師徳たり哥にあやしくたえなりとはあやし

とは有益とかけり無益と書てはあやなしと読されは哥に

あやしとは哥にえきありと云義也 人丸は赤人か上に

たゝむ事かたく。とは是は人丸も赤人も三位なり官又共

に大夫也されは官加階におひての相論にはあらず然は

哥の道にをひて無勝劣と云り或人の義云人丸を上

書て赤人を下に書たれはことほのをきやうを以て知ぬ

人丸まさりたりと云当流には不然たゝ同じ程の人と云

問何^ノ此には同じ様の人と云て古今の内に人丸の哥はあ

また入り赤人の哥はなんそいらぬや若読人しらすの

中を云は彼又皆ぬし有此義如何 答云此段古今の中の大

事別に可有口伝 抑人丸と云は天武の御時出来けるを岩

上の都美好か子とす 勝^{スケルノタニトラカ}格虎むことす彼腹に子あり

柿本の三位観都良是なり万葉の作者也観都良か

子に柿本二丸と云人あり都美好か先祖は住吉大明神の

後胤^{アヲタルヒコ}天足彦国押人の命の末なり人丸は天武持統文

武聖武四代御門の人なり 梅の花それともみえすの哥は同
御時の内裏の哥合によりめりあまきるは天によこきるを

45
オ

44
ウ

云也なへてはおしなへての義也。はのくと当流には読み
はのく^ノと家隆には読む也。此詞四の事に読り明若

寿風の四也。明と云は月日なむとのほのく^ノとさし出て

たるをよむなり。若は木草なむとのほしめてもえ出たる

を云也。寿は命のあたなるを云風はかせのゝとかにふきわた

りたるけいき也。命此哥は寿の義也。是哥は天武第一の

王子高市の親王春宮に備はり給ひけるか十九にて崩御御

座し給へりその事を読む哥也。されは寿哥也。されとも

此哥当集には海上のたひの部に入り是は此哥のみならず

哥のならひ底に心はあれとも部に入るときは面に付ている也

はのく^ノとはかの親王の十九にて死給を云。明石の浦とは

今此国のあきらかなる所にまし^ノつれとも又くらき道

に入給を云。あさとは春宮の太子なれば申也。此王を朝と

云義也。しまくれゆくとはあきつしまをかくれゆき給を

云也。或人の義云嶋かくれゆくとは生老病死の四魔にかく

されゆくといへり。雖然当流にはあきつ嶋をかくれ行を云也

舟おしそおもふとは王をおしむと云義也。此人政しき即位

になけれとも儲の君なるか故に船と云也。王を舟と云事

王は民の世を渡す義を以て船の物を渡すにたとへて船

と云也。史記云大公主^{マツリコト}政^{スナナリ}賢^{オミツレホカニ}悉^{ナキサニ}直^{ナキサニ}惠^{ナキサニ}波^{ナキサニ}流^{ナキサニ}外^{ナキサニ}千万^{ナキサニ}濤^{ナキサニ}貴^{ナキサニ}賤^{ナキサニ}

渡^{ヨクダヘ}レ世^{ナリ}事^{ヨクダヘ}能^{ナリ}妙^{ナリ}故^{ヨクダヘ}号^{ヨクダヘ}ニ^{ヨクダヘ}船^{ヨクダヘ}筏^{ヨクダヘ}誰^{ヨクダヘ}レ^{ヨクダヘ}不^{ヨクダヘ}敬^{ヨクダヘ}又^{ヨクダヘ}貞^{ヨクダヘ}觀^{ヨクダヘ}政^{ヨクダヘ}要^{ヨクダヘ}一^{ヨクダヘ}卷^{ヨクダヘ}云^{ヨクダヘ}

臣^ハ如^ハ水^ハ君^ハ如^ハ船^ハ水^ハ能^ハ渡^ハ船^ハ水^ハ通^ハ覆^ハ船^ハ臣^ハ能^ハ隨^ハ君^ハ臣^ハ返^ハ亡^ハス

レ君^ハされは王を船と云也 赤人か哥に云 春の野にすみ

紫を女と
云人

和歌浦の
歌

れつみにとこし我そのをなつかしみ一夜ねにけり此哥
の心はすみれ草はむらさきの色にほへりむらさきをは
女と云名ありその花の色にほふ故に野へもなつかしく
て一夜ねたりと云也 古仙哥^ニ むらさきの色にほへる
すみれ草おなしゆかりはなつかしきかなむらさきを女と云事
文集云顔女ノ故为重芳如薰紫麝ノ風^ニ此文より女のにほひ
かはせのうつくしき事をはむらさきにたとふ

和歌の浦にしほみちくれはの哥は聖武天皇わかのうらに
行幸ありし時御供にて赤人よめる哥也かたを浪とは

なみにはかならずめなみおなみとて二ツうつなり大なるをお
なみといひ小きをめなみと云一ツ大にうつなみをかたを浪
と云あしへはあしのへん也此人々ををきてとは人麿赤人
ををきてと云心也又すぐれたる人もとは六哥撰をさす也
六哥撰とは 遍昭 業平 小野小町 康秀 黒主 喜撰
是也二聖六哥撰と云時の二聖は人麿赤人也是より
さきとさすは古今よりさきを云也 爰にいにしへの事

をも哥の心をもしれる人わつかにひとりふたりなりとは

彼六人なり 問^ニなんそ六人を一人二人と云也 答云

五六人とかゝはかなのことはに不可然いつたりむつたりと

かゝむことはあるへからさる故にあまたありといへとも先上を
あけてひとり二人と云是其証拠なきにあらす貞観政要^ノ

注云太宗ノ二臣賢^{ニシテ}為君ノ鏡^ニ或人難云太宗^ニ七賢者^{アリト}いへり

なむそ二臣と云哉答云あまた有といへとも其中に一二人を

46
ウ

47
オ

上ぬれは余へ是に接ツサマルといへりされは此心をもつて貫之もかく

かける欽二臣とさすはタチ 窺ヒト方玄齡也七賢と云時は

虞世南ヨセナン 安基 徵子 キ子頤郎是也えたる所えぬ所

有とは彼六哥撰のよみたる哥の中にもよき所もあり

わろき所も有と云彼御時より此方とは平城天皇の万

葉を弘め給ひし事を云也 年はもとせあまりとは

平城延暦廿二年に位に付せ給ひてよりこのかた延

喜五年までは百五年なり 代は十つきとは 平城 嵯峨

淳和 仁明 文徳 清和 陽成 光孝 宇多 醍醐

是也いにしへの事をも哥の心をもしれる人とはいにしへと

云は神の代の哥のおこりをしるを云歌の事をもしれるとは

哥の奥義を知をいふ是を知人おほからずとは貫之我より

外になしと云也つかさ位たかき人をはたやすきやうなれは

いれすと云様如何 此集をみるに延喜平城天智后には二条

后四条后大臣には忠仁公三条大臣河原院大臣近院の大臣

是人々皆いれりなんそ不入と云哉 答云哥のいらぬにはあらず

其名を不入なり問余の集をみるに大上天皇も其名を入

給へり此義如何 答云是は古今の時貫之か意樂に依て

其人の御名をあらはさん事をはかりあるに依て不入其名を

後の集よりなしつほの五人等は道いやしき事ならば

こそ御名を入奉らさらめとて其名をあらはすされは

古今には読人不知と云後の集には貴人その名をあらはす也

抑よみ人不知と書にあまたの義有一には貴人の名をかさ

むる事をはゝかりてかゝす二にはいやしきものなるか故に
不書三には或は高き人をおかし或は勅勸の身と成或は

あしきことなむとに読たる哥なんとは作者も可然人哥も
よけれどもよみ人しらすと入如此是集に貫之か読人不知と

入事は別の義有貫之是集を撰して中書にて王に

奉る我名一首もなかりけるそと問せ給へは奏して

申さく哥はあまたえりて侍れと勝劣を分かて不入又

皆入事は世のはゝかりあるに依て不入時に御門かのうたを

召て御覧するに百首の中にのそきつへき哥一首も

なしされはとて皆入事はゝかりあるに依て九十九首をい

るさのみ名をあらはさん事はゝかりあるに依て少々読人

不知いれり 問人丸は王位大臣の分にあらずとみえたり

なんそ読人不知に入哉 答云是は代々の君の御侍読たる

上和哥の宗匠なり以て此道には是人をおもくす故に名を

入す 僧正遍昭と云は桓武天皇の孫長岡大納言良峯

安世か二男也俗名四位少将宗貞也仁明天皇崩御の時斎

衡二年三月十三日十七にして出家法名行覚と云清和御時

遍昭寺を造て僧正に任ふ仍遍昭僧正と云六十九にて卒す

哥のさまは得たれとも実すくなしとは哥の体可得心たれ

とも歌の奥義をは不知と云 あさみとりとはあさきみとり也

初春の柳をみてよめり玉にもぬけるとは柳の糸に白露の

つらなりたるはたまをぬけるといへりつらを略せる也上略

なりはちすとははちすの花也是は下略の哥也

「 48 ウ

「 49 オ

「 49 ウ

にこりにしまぬ心もてとは多^ク人は是を尺教の哥と思へり
 是尺教に非すにこりにしまぬ心もてとははちすは泥にも
 けかされず濁にもしまぬ是にをける露は物にけかされぬ
 心なりそれをあたなる露の玉とてあさむくへからす是こそ
 実の白玉よとよめり万葉云大伴の大貞か哥也河岸^{カハシ}
 野小サム分出留蓮花野上置留露野珠勝紫是哥も^{ワタリルハスヘンツルユノタマハテコツ}
 はちすはの露はこと物に置露よりも殊勝也と又云家持
 か集云日爾みかき風にさらせる露の玉のひかりそまさ
 るはちすはの上是等皆同心なりあさむくとはそしる義也
 嵯峨野にて馬よりおちて読るとは是哥を讀てわさと馬
 よりおちたる由をして読る也名にめてゝおれるはかりそとは
 女と云名のあるにめてゝこそおりたれ汝に落たりと人
 にかたるなといへり 在原業平と云は平城天皇の孫阿保
 親王の五男母伊豆内親王也時に左近中将也心あまりて
 ことはたらすとは歌の深義はしりたれとも風体なたらかな
 らすと云月やあらぬの哥は貞観十三年正月に五条内裏の
 西の対にて二条の后に忍ひてあひたてまつりたりしに
 后は長良の卿娘清和ノ后陽清ノ母也業平しけくかよう
 そのきこえ有によて後の兄基経后を我宿所にをしかく
 し奉りたりける時次の年の正月に彼西対を行てみれば
 月も梅花も我もこそにはかはらす后はかりましまさぬは月も
 春もあらぬかとよめり 大かたの月をもめてしこれそ此
 つもれば人の老となるもの是はおほかた月をめてにし

数つもれば老となるものと読り家隆ニめてしとよめり

是より後月にはめてしかすつもればおひとなるにとよめり

此哥行平有常等とよりあひて月みてよめるなり

ねぬる夜の夢をはかなみの哥は君とねぬるよははかなき

夢のことしその事を夢にみれはいやはかなしといへり

いやはかなしとはいよ／＼はかなしと云義也是哥は小野小町に

にあふて後に読てやりける哥也文屋康秀は参河守

天忍か孫正親正朝康か二男時に縫殿の助也詞はたくみに

してそのさまいやしとは哥の言葉はたくみによみたれとも

歌のすかたよからず深草の御門の御国忌とは仁明天皇齊衡

二年の春崩御の事を云也深草の御門とは仁明天皇の事也国忌

とは国王の御いみを云也 草深きかすみのたに／＼かけかくしとは深草

の霞谷に送り奉りしを云てる日のくれしとは国王の崩し給を

云也けふにやはあらぬとはけふは其一周忌にはあらぬかと云王を日

と云事文集云帝日峯ニ没シテ万侶暗深シ公雲谷ニ陰テ百官歎厚シ

是は太宗皇帝の崩御の時九里松の山の頂きに送り奉りけ

る時の事を書り同文云堯日没シテ舜風和ナリ此等の文皆王を日と

云也 宇治山の喜撰とは諸兄大臣ノ孫子奈良丸か孫周防守

良殖か子也醍醐法師宇治山には遁世してすみける也言葉

かすかにしてはしめおはりたしかならずとは哥のてにはのと

のをらぬ哥也我庵はみやこのたつみしかそすむとは宇治山は

みやこの辰巳也しかそ住とは而すむと云義也よをうち山とは

世をうき山と云儀也五韻のひ／＼きを知へしされはよをう

51
ウ

51
ウ

き山と人は云なりと云読る哥おほからすとは 一期に哥二首より外によまさる也是は哥をよみえぬには非す無尽ノ風体を得てよまは残る風勢あるましき間文徳御門より哥不可読と勅定を蒙て哥をよまさる也 小野小町は

古のそとをり姫の流也トはそとをり姫の哥の流をうけて

読也氏のすゑにはあらず小町は中納言良実の孫出羽守

小野常初ツネハジメの娘也そとをり娘は応神天皇の孫稚渟毛ワカノモ二流

の王子娘也允恭天皇の後也抑此人は玉津嶋の明神といわれ事

には家々に云様有其も皆いわれなきにあらず当流に習所は

光孝天皇の御なやみありける時諸の御祈有明「禱ある曉に」ほのにあか

き袴きたる女房枕に立て云 立とり又もこの世にあと

たれんその名うれしき和哥の浦浪 御門御夢にかく見

給ひければ夢の内に誰人そと問給そとをり妃と答へ給ふ

〔の〕

〔中〕

〔三〕

さて仁和三年九月十七日右大弁源隆行タカを勅使として和哥

浦玉津嶋に社〔聖〕を作り信遍上人を以て勸請して奉崇本地

正観音也此ひめの和哥浦にあとをたれ給ふ事はかの立かへるの

哥〔見えたり〕に依也是は和哥浦と云名の事に目出ければかれにあとをたれ

むとおほしめすといへり おもひつゝの哥は業平をこひける時

夢に見えたりける時よめる哥也色みえてうつろふ物はの哥

は大江の惟章か女となりたりける時これあきら心かはりして

藤原の朝行かむことなりけるを読る哥也是は文集の文の心

を読る哥也文集云悲不アハシクシタノヘコソク憑空人之心似リヨウケン山花散リ安ニ空人とは

心はかなき人也此文は龍珍と云人の色好にして一かた

わか
せこ

さ
かに

ならざるを恨て彼めのなけきける事をあはれかりて
白居易のあそはして竜珍か許へ送り給ひけり

わひぬれはの哥は業平にすてられてなけきける比文屋の
康秀三河守になりて下りけるかゝるなかの方へ下りてあそひ
給へと云ける返事に読てやりける哥也身をうき草と云は身
をうきくさと云事也わかせこと云に三ノ義有一には若男ト書二

には我男と書三には和なる男と書り今こゝに云は若男我男
と云二の義也此哥は万葉に有哥に云 若男賀可来宵

南里小々蟹野蜘蛛野振舞兼天焉毛 此哥は允恭天皇

のいまた皇子にておさなく御座し時仁賢の妃宮に合せ
奉らむといひけるを允恭そとをり姫に思ひ付給てさら

にもちひ給はす此時妃は世にわひたる身にてまし／＼
けるを允恭忍てかよひ給ひけるを乃恭の父仁徳天皇制

してゆるし給はすさてえましまささりける比たかひ
に恋給事かきりなし妃か家にぬきをき給ひける允恭
の御衣を被御形見と思ひて妃きてゐたり允恭の妃

をこひ給ふ御玉しるくもとなりてかの妃か着る衣の中
にはいりてゐたり取てすつれは又はいり／＼しければ

妃あやしみて彼御玉しるくもなりてきたるよと心得て
是程思召さんには定てましまさむすらむと心やすく

思ひて読奉る哥也是よりしてくものふるまひと云事

いひはしめたり又和男ト書けるはなさけ有男の事也

古撰云 風吹波ナヒク 柳野色南礼哉心当南留和男賀袖

└ 53
ウ

└ 53
オ

すへらぎ

されは此和男と云はたわやかにやさしき体なり太伴の黒主ト

は宣化天皇の後胤猿丸大夫か孫太伴の烈子か子也たきム

をへる山人の花の陰にやすめるかことしは哥の大かた

のかゝりはよけれどもこまやかなるすかたわるしと云

思ひ出の哥は仲原の康通か娘を恋てよめる歌也鏡山の

哥は平城の御時むさしの様なりて行ける時あふみの

かゝみ山にてよめる哥也すへらきとは王の御事也二の義

有一には末開ト書り是は王はすゑ繁昌しますと云義

也二には万騎主と書り是も王の義也万葉云未開野広

惠波渡津海野波野寄留方限無柴天不尽里建里

此哥は天武天皇の御事をほめ奉りて読り大中臣の東人か哥也

又同集云峯越吹風爾付天哉万騎主野惠普具人爾灑賀無

文集云万騎主位高山又山峯復峯重々トシテ仰三天月一悉々惠二地風一

祖師匠恩深海又海浪又浪昼々得ニ乗貴一何不報賤侶ノ師ノ

恩一文の心は白樂天時ノ御門御侍読なりしに恩をかうふらさり

ける事を恨て書て奉る文也御門是をみ給て王位たる

ものに直にかく申はとて文をなけたりければ手よりあし

き病付て死に給と注せり乗騎は国王の位也賤侶とは

白居易我身を卑下して書給ことは也あめのしたをしろし

めすとは天下を知食を云也是は延喜御事也よつの時は四歳

の御時にはあらず寛平九月四日に位に付給ひしを云也されは

四月を取てよつの時と云也問何四月をよつの時と云哉

答云月を時と云其本文あり左伝ノ注ニ云呉搜之生レ舜ヲ

「 54 ウ

「 54 オ

老^テ後^チ都^ト冥^{マイ}六年三月^{ミツノトキ}書^キり又政^{ササキ}經^ノ云上陽王妃十六歳にして

始^{ハジメ}て入^{イル}内^ニ質^{シテ}容^{ヨウ}瑩^{エイ}月^{ツキ}心^{シン}花^カ開^{ヒラ}書^キりされはよつの時とは四月

を云也 こゝのかへりとは寛平九年に延喜位に付給て

より延喜五年までは九年也寛平のこり一年昌泰三年

延喜五年までなり あまねき御うつくしみのなみとは

御恵のなみ也 八嶋とは日本名也日本の八嶋と云は九国 四国

老岐 対馬 隠岐 佐渡 長門より奥国まで也以上八嶋也

是を八嶋と云也 つくは山のふもとよりもしけくとは是は

付葉山の義也 いにしへの事をもわすれふりにし事を

もをこし給とてとは古とさすは万葉をえらひ上古の

哥の道のさかへたりし事をもわすれしと云也ふり

にし事をもおこし給とは延喜已前の上古の哥万葉

にもれたる哥ともをあつめ又時の人々のそのかみよみた

りし歌ともを召集るを云也家隆云古のこともわすれ

しふりにし事をもおこし給とは今此古今一をもてな

してすゑの世のかゝみとし今のたからとする故に

古今万葉の事をもわすれたりと云ふりにし事を

おこすとは時の人々の年ふりたりし哥共をえらひて

古今とする事を云也当流より難云本を仰て末を成する

は諸道の習也何^ニ今^ノの古今^ヲを證^{セン}とするに依て万葉の事を

わするゝか若かは古今の中に万葉を証哥とせる哥有此義

不可然 いましみをなわせとは見備と書り大内記紀友則は紀

納言長谷雄^{ヘセツ}孫大和守有朋^{アリトモ}か二男六十にて此勅を承る此集の

— 55 ウ

— 55 オ

秋部まで撰して六十一と云延喜五年二月に卒す同友則は

延喜五年二月に卒すとみへたり本書は四月十八日に友則等に

仰付てと有此義如何 答云此集を撰しはしめし事は延喜

四年三月十一日今は五年四月十八日と云は撰し終し時の事も

されは撰者となて仲間にしねとも其人収たるに依て没後な

れともこゝに其名を書也同序のことくは四月十八日か撰し

始めたる様に見たり何終と云哉 答云物を書いて其年号

を書事は必ず終を書故に貫之も終の年号を書とも勅をうけ

たまはし事をかきあらはすに依て始のことくにきこゆる也御

書所のあつかり紀貫之は紀文幹か子也于時木工頭御書所

の預りと延喜の御時哥の御書をあつけ置くゝに依て云也

抑此貫之とは父文幹長谷に参りて経を給ると夢に

みてまうけたる子也仍はらは名内教房云と三十四にて

勅を承たる也七十九にて卒す躬恒は于時かいの小目さつくわむ

姓はをふし河内也行武か孫湛利か子也四十六にて勅を承る四十九にて

卒す 忠峯は于時右衛門ふしやう是は和泉ノ右大将藤原ノ

定国か隨身忠氏か孫忠衡か子也三十一の年内裏の哥合に晧

の別の心の哥をつかまつりたりければ御門御感有て定国に

こわせ給ひて内裏の隨身とす三十六の年昇殿三十七の年勅

を承る古今已後に右京大夫に任す九十八にて卒す其めさ

れし時の哥には 有明のつれなくみえし別れより晧はかりうき

物はなしみつからのをもたてまつらしめ給とは四人の撰者の

哥をもたてまつらしめて此集に入を云 梅をかさすと云よ

56
ウ

56
オ

ゆふ付鳥
やこくたか
夜越鳥

りは部の次第をあくる也 梅をかさすとは春ほとゝぎすを
きくとは夏紅葉を折とは秋雪をみるとは冬君をいわふとは
賀秋はき夏くさをみてつまをこひとは秋はきのうつ

ろひやすきに人をうらみ夏草のしけきに思ひのしけきに

たとふる是は恋の心也 相坂山にたむけをいのりとは神祇の事也

相坂山にたむけを祈るを云 日本記云天智天皇の御時世の中のあ

しかりければ四関のはらへをして世の事を祈る四関とは

相坂 鈴鹿 瀧田 須磨是也すまの関にてははらへをし

て海に神供を入れる鈴鹿にては鹿にはらへ付てはなす

相坂と瀧田にてはには鳥にくたをくさりて付てしらゆふをむ

すひ付て世のあしき事をはらへ付てはなつ其よりすゝか

の山のみそきには鹿をよみ龍田相坂のみそきにはゆふ付とり

をよむ此因縁を以て鶏をゆふ付鳥ともくたかけとも云又鶏を

ハこゑの鳥と云名有是は八音の義にはあらす夜越鳥と書り万

葉云関守波今波臥悟爾南里怒良紫夜越野鳥野音野

気々されは相坂にたむけをいのりとは此心也春夏秋冬にも

いかすは雑の部の事也いまはあすかかわのせになるうらみもきこ

えずとは彼あすか川は水上ちかくてすこし雨ふれば水つねに

まさる是にて淵瀬常にかはるされは今古今をあつめ

をかれなは飛鳥川のふちせさたまらぬことくに歌の出きうせん

する事もあらしとて長能私記云賢君子無二心其言ヘルコト石鉄

如レ難レ擢レ少人有多心其言ル不定似飛鳥川ノ替淵瀬ニされはあすか川

ふちせかはりやすき物也 まくらことはとは人丸の哥枕とて哥

└ 57才

└ 57ウ

をよむへき風情をあつめ給へる物有家にひする物なり

一卷の書 春の花にほひすくなくしてむなしき名のみ

とは此御時此道さかへては哥よむ人多き故に枕言の風情もつき

てふるき事ともになりてむなしき名のみ有と云 秋の夜のな

かきをかこてりとは秋の夜のなかきねさめに歌をよめはかつ

は人のみゝにもをそりと云をそりとをそれと云事也是は

哥のまことをもしらすしてうたをよめは人のみゝもをそれ

ぬへしと云 哥の心にはちをおもへとは哥のまことをしらす

れはうたの思はむ心もはつかしと云心也 たなひく雲のた

ちゐなくとは此世には此道さたまりてたなひく雲の立居

る事もなしと云 鹿のをきふしとはしかのおとろきやす

くしてねふる事すくなし此鹿のことくに貫之等此道

をたしなみよるひる君に仕へ奉りてねふる事なきを云

此事の時にはとは古今をあつむる時の事也 歌の事

とまれるかなとは哥の道の世にとゝまるを云 ときうつりこと

さりととは時世うつり如此この道のひろまる事去てよろこひ

かなしみあひましわるこゑの後の世までも三十一字のあるをや

と云也 青柳の糸とは此道なかくたえしといわむため也

松のはとは此道ちりうせすとはいはんため也

まさきのかつらとはなかく世につたはらむといはん為也まさき

とはまさきのかつら也白くちと云物也 鳥のあととは哥の

文字の世になからへん事を云文字の鳥のあとゝ云事は

蒼顔か千鳥の踏をみて文字を作りたりし事を云也

文字を
鳥のあと
云事

58
オ

58
ウ

哥のさまをしりとは哥のすかたをしりと云事也

ことの心をえたらん人とは哥の心をえたらん人と云義也

おほそらの月をみることはたかく此道をあふけと云

事也 いにしへをもあふきてとは古今の古文字をさ

すことはなりされは延喜以前うた万葉の比哥のさかり

なりし事をあふけと云事也 いまをこひさらめかも

とは今文字をさすことは是は延喜の御時此道の盛り

なりし事をも末の世の哥人こひんさらむと云されは

古今の哥の頂上として人の宝となれば此集を仰く

へしと云也

以上序口伝

古今和歌集序聞書尾

「 59 才

「 59 ウ

「 後見返し

「 後表紙

注

注*1

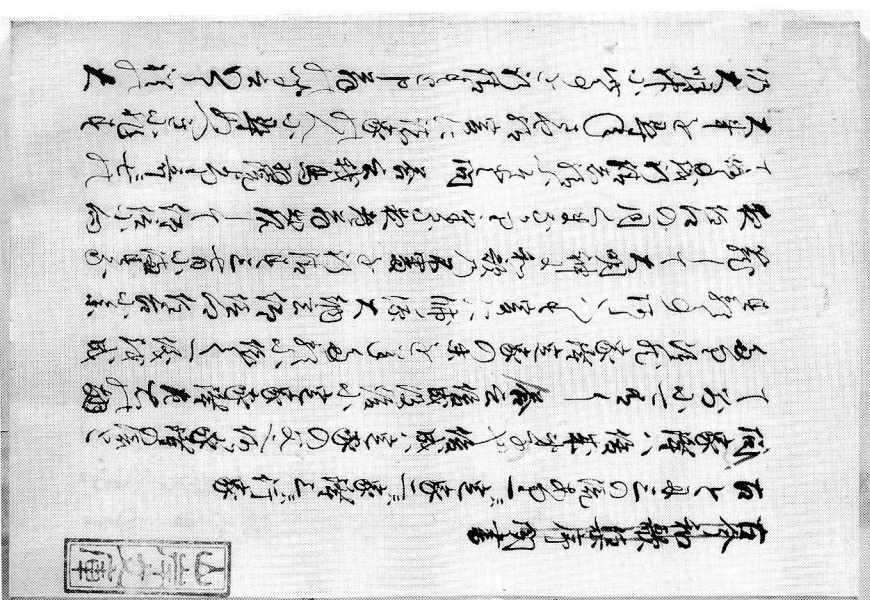
十一丁ウラ一行目「五代と云」の次に「也次日神よりうのは」と記されているが、これは十一丁オモテ十一行目「司るを五代と云也次日神よりうのはふきあはせすのに」(傍点は私に施した)の目移りによる誤写と思われるため、十一丁ウラ一行目の翻刻本文からは削除した。

注*2

三八丁ウラ二行目「海の面あれて」の次に「波嶋をみれば海の面あれて」と記されているが、目移りによる誤写と思われるため、翻刻本文から削除した。



山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』第1冊目表紙



山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』第1冊目1丁表